

[資料・批評]

## 2016 年アート・クリティック活動の報告

### 演劇研究グループ

編集委員：安藤隆之、酒井正志、玉崎紀子、服部厚子

はじめに

2016 年アート・クリティックの活動報告をお届けする。アート・クリティックの活動報告の紀要への掲載は「演劇研究グループ」の研究活動の一環として 2010 年から始まった。月 1 回のペースで、グループ内の所員・準所員をはじめ、演劇、オペラ、音楽の愛好家たちが集まり、それぞれの観劇体験を語り合ってきた。今年も名古屋及びその近郊だけでなく関東や関西圏にも足を伸ばし、さらにはイギリスにも出かけ、鑑賞した演劇、オペラ、音楽などの公演数は全部で 139 に及んだ。そのリストといくつかの公演に対する論考を掲載した。

「演劇研究グループ」は本研究所の発足とともに活動を開始した。本研究所の基本的な研究体制が「グループ研究」であるために、「グループ」の中に所員がいなくなれば、「グループ」は消滅する。「演劇研究グループ」はメンバーである所員 2 名が定年退職を迎える今年度をもってその活動を終えることになる。これまで「演劇研究グループ」は「劇場調査」「現代社会におけるヨーロッパ近代演劇の演出をめぐって」「日本の伝統芸能とヨーロッパ演劇との比較研究」「21 世紀のリージョナル・シアターと近代演劇」などをテーマに研究をつづけ、『文化科学研究』に論考を発表してきた。また、研究叢書として『ヨーロッパ演劇の形』（2001 年）、『欧米演劇を探る』（2002 年）、『地域と演劇』（2003 年）、『劇場文化の構造』（2004 年）を上梓することができた。さらには、演劇に関する研究図書の収集にも努めてきた。充分とは言えないながらも、基本的な図書資料を研究所の蔵書として収集したので、研究所の貴重な財産として、是非広く活用していただきたいと思う。「演劇研究グループ」はなくなるが、アート・クリティックの活動は、来年度からも、何らかのかたちで継続したいと考えている。

（酒井正志 記）

## ・ 2016 年アート・クリティック活動の報告

2016 年アート・クリティック例会において報告された観劇演目のリスト。ほぼ日付順に通し番号をつけて以下に記載する。ただし 2015 年 12 月に観劇したもので、2016 年 1 月に報告された演目も以下に掲載する。

能「翁」、狂言「鶏聾」、能「竹生島」(名古屋能楽堂正月特別公演 徳川家康公没後四百年記念「家康ゆかりの能」) 1/3(日) 13:00～ 名古屋能楽堂 (磯野)

コンサート「NHK 名古屋ニューイヤーコンサート」(名フィル 円光寺雅彦指揮・横塚信也 p.& 司会、田中彩子 sop) 1/3(日) 17:00～ 愛知県芸術劇場コンサートホール (磯貝)

コンサート「2016 ニューイヤー・コンサート」(ハンガリー国立ブダペスト・オペレッタ劇場) 1/9(土) 15:00～ 豊田市コンサートホール参考館 10F (玉崎)

演劇『元禄港歌 千年の恋の森』(秋元松代作、蜷川幸雄演出) 1/10(日) 14:00～ シアターコクーン (伊藤)

人形音楽劇「泣いた赤鬼」(江戸糸あやつり人形座・結城座 浜田廣介原作 天野天街脚本・演出) 1/16(土) 16:00～ 四日市市文化会館第 1 ホール (服部)

MET ライブ・ビューイング「ルル」 1/16(土) 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ (塹江 (1/19(火)))

ナショナルシアター・ライブ「ハムレット」(カンバーバッチ主演) TOHO シネマズ名古屋ベイシティ (服部 (1/24)、玉崎紫・玉崎 (1/27))

コンサート「茂木大輔の生で聴く“ のだめカンタービレ ”の音楽会」 1/24(日) 15:00～ 春日井市民会館 (磯貝)

演劇「逆鱗」(野田秀樹作・演出) 1/30(土) 19:00～ 東京芸術劇場プレイハウス (玉崎紫)

演劇「クラブマクベス」(こんにゃく座) 2/6(土) 13:00～ 吉祥寺劇場 (服部)

- MET ライブ・ビューイング「真珠とり」 2/6(土) 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ  
(塹江 (2/8)、玉崎 (2/7))
- 映画「シーズンズ 2 万年の地球旅行 SEASONS」 2/11(祝・木) ミッドランドスクエア・シネマ  
(磯貝)
- 演劇「思い出し未来」(少年王者館) 2/18(木) 19:00～ 四日市市文化会館第1ホール (服部)
- ミュージカル「ミュージックマン The Music Man」名古屋市文化振興事業団企画公演 2/19～21  
アートピア・ホール (服部・玉崎 (2/20 16:00～)、磯貝 (2/20 11:00～))
- 演劇「ピアフ」(栗山民也演出・大竹しのぶ主演) 2/26(金) 19:00～ シアタークリエ (伊藤)
- コンサート「Bee」(及川浩治トリオ) 2/27(土) 15:00～ 日進市民会館大ホール (玉崎)
- コンサート「第2回ウニータ・デラ・サクソコンサート」 2/26(金) 19:00～ しらかわホール  
(服部)
- 映画「キャロル」 2/27(土) 109 シネマ四日市、12/20 イーブル名古屋  
(服部 (2/27)、塹江 (12/20))
- MET ライブ・ビューイング「トゥーランドット」(ニーナ・ステンメ主演) 2/27(土) 10:00～  
ミッドランドスクエア・シネマ (塹江 (3/2(火)))
- 能「山姥」名古屋能楽堂三月定例公演 3/5(土) 14:00～ 名古屋能楽堂 (三笠)
- ②①オペラ「さまよえるオランダ人」 3/5 (土) 14:00～ びわ湖大ホール (塹江)
- ②②ミュージカル 宝塚「アーネスト・イン・ラブ (Earnest in Love)」中日劇場 (2/20～3/9)  
(磯貝 (3/6(日) 11:00～)、玉崎紫 (3/8(火) 12:00～))
- ②③オペラ「夕鶴」 3/12(土) 14:00～ 愛知県立芸術劇場大ホール (玉崎)
- ②④コンサート「茂木大輔の生で聴く“のだめカンタービレ”の音楽会」 3/13(日) 15:00～ 春日井  
市民会館 (磯貝)

- ②⑤オペラ「天守物語」 3/19(土) 14:00～ 兵庫芸術文化センター阪急中ホール (服部・玉崎)
- ②⑥映画「リリーのすべて」 3/24(木) 伏見ミリオン座 (磯貝)
- ②⑦オペラ「万葉集」(千住明作曲&指揮・演奏会形式) 3/26(土) 14:30～ 愛知県芸術劇場コンサートホール (玉崎・塹江)
- ②⑧MET ライブ・ビューイング「マノン・レスコー」(リチャード・エア演出) 4/2～4/8 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ (塹江(4/5)、玉崎(4/6))
- ②⑨ミュージカル「ジキルとハイド」 4/10(日) 13:00～ 愛知県立芸術劇場大ホール (玉崎)
- ③⑩演劇「陽なたの干しぶどう」 4/14(木) 14:00～ 千種文化小劇場 (玉崎)
- ③⑪ナショナル・シアター・ライブ「橋からの眺め」 4/9(土) 17:25～ TOHO シネマズ名古屋ベイシティ (伊藤)
- ③⑫オペラ「森は生きている」(名古屋オペラ協会・池山奈都子演出) 4/16(土) 13:00～ 熱田文化小劇場 (玉崎)
- ③⑬コンサート「イル・ディーヴォ IL DIVO」 4/20(水) 日本ガイシホール (磯貝)
- ③⑭演劇「九条丸家の殺人事件」 4/27(水) 19:00～ 日本特殊陶業市民会館ビレッジホール (服部)
- ③⑮ミュージカル「グランドホテル」(中川晃教主演) 4/28(木) 14:00～ 愛知県芸術劇場大ホール (玉崎)
- ③⑯演劇「観客」(クセック) 4/28～ 愛知県芸術劇場小ホール  
(塹江・服部(4/28)、磯野(4/29))
- ③⑰演劇「三代目、りちゃあど」(野田秀樹作 オン・ケンセン演出) 4/30(土) 16:30～ 5/1(日) 14:00～ 静岡芸術劇場 (伊藤(4/30)、服部(5/1))
- ③⑱ミュージカル「オペラ座の怪人」 5/4(日) 13:00～ 名古屋ミュージカル劇場 (磯貝)

- ③⑨コンサート「茂木大輔の生で聴く“ のだめカンタービレ ” の音楽会」 5/8(日) 15:00～ 春日井  
市民会館 (磯貝・服部)
- ④⑩MET ライブ・ビューイング「蝶々夫人」(A.ミゲラ演出 [2009 年再演] オポライス & アラーニャ)  
5/7～5/13 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ  
(塹江・伊藤 (5/10)、服部 (5/11)、磯野 (5/12))
- ④⑪能「女郎花」(名古屋能楽堂 5 月定例公演) 5/15(日) 14:00～ 名古屋能楽堂 (三苦)
- ④⑫オペラ「チャルダッシュの女王」(ウィーンフォルクスオーパー来日公演) 5/15(日) 15:00～  
東京文化会館 (塹江)
- ④⑬映画「マクベス」 5/19(木) 14:00～ 伏見ミリオン座  
(服部 (5/14)、伊藤 (5/19)、塹江 (6/8))
- ④⑭オペラ「本能寺が燃える」(市川右近演出) 5/21(土) 18:00～ 名古屋能楽堂 (塹江)
- ④⑮MET ライブ・ビューイング「ロベルト・デブリュー」(ラドヴァノフスキー & ガランチャ)  
5/21～5/28 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ (玉崎 (5/22)、塹江 (5/27))
- ④⑯「東北の神楽」(東日本大震災復興支援)国立文楽劇場 5/28(土) 13:00～ (三苦)
- ④⑰オペラ「メリー・ウイドウ」(ウィーンフォルクスオーパー来日公演) 5/29(日) 14:00～ 東京  
文化会館 (塹江)
- ④⑱英語劇 A Midsummer Night's Dream (Nameless Theatre) 6/4～6/6 名古屋市芸術創造セン  
ター (服部 (6/4(土) 13:00～))
- ④⑲MET ライブ・ビューイング「エレクトラ」 6/4(土)～ 10:00～ ミッドランドスクエア・シネマ  
(塹江・伊藤 (6/7))
- ⑤⑩能「鵜飼」 6/11(土) 13:00～ (若鯨能) 名古屋能楽堂 (三苦)
- ⑤⑪演劇「ロミオとジュリエット」(カンパニーデラシネラ) 6/12(日) 14:00～ 穂の国とよはし芸  
術劇場 PLAT 小野寺修二演出・東京芸術劇場制作 (服部)

- ⑤②オペラ「ラ・ボエーム」(スポレート歌劇場公演) 6/18(土) 17:00~ 愛知県芸術劇場大ホール  
(玉崎・塹江)
- ⑤③オペラ「オペラの魅力 25」(Shakespeare 没後 400 年記念「イル・トロヴァトーレ」などハイライ  
ト) 6/21(火) 18:30~ しらかわホール (塹江)
- ⑤④コンサート「バーミンガム市交響楽団」(山田和樹指揮) 6/25(土) 17:00~ 愛知県芸術劇場コ  
ンサートホール (塹江)
- ⑤⑤ダンス「エタニティ」 7/2(土) 14:00~ 愛知県芸術劇場小ホール (塹江)
- ⑤⑥バレエ「ロミオとジュリエット」(英国ロイヤルバレエ団) 7/3(日) 13:30~ 愛知県芸術劇場大  
ホール (塹江)
- ⑤⑦能・名古屋能楽堂 7 月定例公演「鉄輪」 7/3(日) 14:00~ (三苦)
- ⑤⑧オペラ「友人フリッツ」(稲葉地オペラ) 7/3(日) 14:00~ 東文化小劇場 (服部・玉崎)
- ⑤⑨ナショナル・シアター・ライブ「人と超人」 7/4(月) 16:20~ TOHO シネマズ名古屋ベイシテ  
イ (伊藤)
- ⑥⑩演劇「+51 アビシオン、サンボルハ」(岡崎藝術座・神里雄大作・演出) 7/9 (土) 三重県文化会  
館小ホール (服部)
- ⑥⑪第 17 回名匠狂言会・名古屋能楽堂 7/10(日) 13:30~ (磯野)
- ⑥⑫映画「帰ってきたヒトラー」 7/12(火) 14:25~ 伏見ミリオン座 (竹本・服部)
- ⑥⑬映画「ベルリン・フィル・イン・シネマ」(サイモン・ラトル指揮・ベートーベン交響曲 No.4 &  
No.7) 7/13(水) 19:00~ イオンシネマ名古屋茶屋 (伊藤)
- ⑥⑭映画「アリス・イン・ワンダーランド」 7/14(木) ミッドランドスクエア・シネマ (磯貝)
- ⑥⑮舞楽「奈良 春日神社の舞楽」 7/17(日) 13:30~ 名古屋能楽堂 (磯野・塹江)

- ⑥⑥ロシア観劇 2015 年 11/14～21 フォメンコ工房（プーシキン 3 部作）・国際演劇大学祭（学生演劇 2 本）・モスクワ芸術座（「桜の園」）・ユーゴザパド劇場（「フールズ」）など（六鹿）
- ⑥⑦「松竹花形歌舞伎」 7/18(月) 16：30～ 春日井市民会館（磯貝）
- ⑥⑧Noism 劇的舞踊「ラ・パヤデールー幻の国」（金森穰振付・平田オリザ演出 & SPAC） 7/24(日) 16：30～ 静岡芸術劇場（伊藤）
- ⑥⑨オペラ「夏の夜の夢」（一部日本語、英語上演・ブリテン作曲、Shakespeare 作、佐渡裕指揮） 7/24(日) 14：00～ 兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール（服部（7/30）、玉崎（7/24））
- ⑦⑩オペラ「ドン・キホーテ」（マスネ作曲・フランス語上演・園田隆一郎指揮・びわ湖声楽アンサンブル） 8/6(土)・8/7(日) 14：00～ びわ湖ホール中ホール（服部（8/6）、塹江（8/7））
- ⑦⑪びわ湖セミナー「沼尻竜典オペラ指揮者セミナー 「ドン・ジョヴァンニ」指揮法（若杉・長野音楽基金 [大阪交響楽団・5 名の若手指揮者]） 8/10(水)～8/12(金) 16：20～ びわ湖ホール（塹江）
- ⑦⑫演劇「夏の夜の夢」（Oxford 大学演劇協会来日公演） 8/11(火) 13：30～ 京都芸術劇場春秋座 8/14(日) 13：00～ 東京芸術劇場シアターイースト（服部（8/11）、玉崎（8/14））
- ⑦⑬演劇「艶情 夏の夜の夢」（柿喰う客公演） 8/7(日) 13：00～ 吉祥寺シアター、8/19(金) 18：45～ ナレッジシアター（大阪）（伊藤（8/7）、服部（8/19））
- ⑦⑭シネマ歌舞伎「牡丹燈籠」 8/21(日) 9：50～ ミッドランドスクエア・シネマ（伊藤）
- ⑦⑮ミュージカル「ウエストサイドストーリー」（劇団四季） 8/24(水) 13：00～ 日本特殊陶業市民会館フォレストホール（磯貝）
- ⑦⑯能「班女」「船橋」（名古屋能楽堂 9 月定例公演） 9/4(日) 14：00～ 名古屋能楽堂（三苫）
- ⑦⑰オペラ「マハゴニー市の興亡」（プレヒト作・クルト・ヴァイル曲・白井晃演出 山本耕史・マルシア出演） 9/9(金) 19：00～ 神奈川芸術劇場（KAAT）（服部）

- ⑦⑧演劇「まちがいの喜劇」(KAWAI Project vol.2 河合祥一郎演出) 9/10(土) 14:00～ あうる  
すぽっと (玉崎・玉崎紫)
- ⑦⑨演劇「クレシダ」(ニコラス・ライト作・森新太郎演出・平幹二郎主演) (演) 9/10(土) 13:30～  
シアター・トラム (服部)
- ⑧⑩演劇「任侠沓掛時次郎」(シス・カンパニー公演・長谷川紳原作・北村想脚本・寺十吾演出)  
9/10(土) 17:00～ 新国立劇場 (服部)
- ⑧⑪オペラ「ラインの黄金」(コンサート形式公演・愛知祝祭管弦楽団) 9/11(日) 16:00～ 愛知県  
芸術劇場コンサートホール (服部・塹江)
- ⑧⑫オペラ「奥様女中」(友の会員限定公演・中村貴志指揮・吉田恭子・伊藤貴之主演) 9/15(木)  
18:45～ 豊田市コンサートホール (塹江)
- ⑧⑬人形劇「山ぐるみ人形劇 マクベス」ベビー・ピー公演 9/18(日) 損保ジャパン興亜人形劇場ひ  
まわりホール (服部)
- ⑧⑭あいちトリエンナーレ 2016 プロデュースオペラ『魔笛』(W.A.モーツァルト作曲・全2幕・ドイ  
ツ語上演・日本語字幕付き・台詞は日本語/ガエタノ・デスピノーサ指揮・勅使川原 三郎演出)  
9/17(土)・19(月・祝) 15:00～ 愛知県芸術劇場 大ホール (玉崎 (9/17)、塹江・伊藤 (9/19))
- ⑧⑮演劇「OH! マイママ」(四日市演劇鑑賞会 劇団 NLT) 9/19(水) 18:15～ 四日市市文化会館第2  
ホール (服部)
- ⑧⑯コンサート「田中彩子リサイタル」 9/22(木・祝) 14:00～ しらかわホール (磯貝)
- ⑧⑰オペラ「ボッペアの戴冠」 9/24(土) 14:00～ 名古屋市芸術創造センター (磯貝・服部・玉崎)
- ⑧⑱演劇「頭痛・肩こり・樋口一葉」(こまつ座公演) 9/29(木) 16:30～ 中日劇場 (伊藤・三苔)
- ⑧⑲能「名古屋淡交会別会」 部「敦盛」「天鼓」他 部「道成寺」 10/1(土) 10:30～ ( 部)、  
14:30～ ( 部) 名古屋能楽堂 (塹江)



- ⑨⑩ 狂言「鬼瓦」ほか（茂山狂言会特別公演 五世茂山千作・十四世茂山千五郎襲名披露公演） 10/15  
（土） 13：00～ 名古屋能楽堂 （三苦）
- ⑨⑪ 人形劇「The Overcoat（外套）」（Credo Theatre） 10/2（日） 14：00～ 損保ジャパン日本興亜人  
形劇場ひまわりホール （服部）
- ⑨⑫ 映画「めぐりあう日」 10/2（日） CINEX （竹本）
- ⑨⑬ 映画「ハドソン川の奇跡」 10/2（日） 11：30～ シンフォニー豊田ビルシネマ （伊藤）
- ⑨⑭ ナショナルシアター・ライブ「The Hard Problem」 10/3（月） 18：25～ TOHO シネマズ名古屋  
ベイシティ （伊藤）
- ⑨⑮ 歌舞伎「錦秋名古屋顔見世」（「橋弁慶」「壺坂霊験記」「じいさんばあさん」[昼公演 11：00～]；  
夜「菅原伝授手習鑑」「英執着獅子」「品川心中」）[夜公演 16：00～] 名古屋特殊陶業市民会館ビ  
レッジホール （磯貝（10/9（日）昼・10/3（月）夜）、塹江（10/14（金）昼・10/11（火）夜））
- ⑨⑯ 人形浄瑠璃「文楽」（「妹背山婦女庭訓」[昼]・「近頃河原の達引」[夜]） 10/7（金） 14：00～・18：  
30～ 名古屋市芸術創造センター （磯貝（昼夜）、塹江（昼夜）、玉崎（昼のみ））
- ⑨⑰ ミュージカル「キンキー・ブーツ」（ブロードウェイ来日公演） 10/8（土）～ 東急オーブ  
（服部（10/8 12：30～）、玉崎・紫（10/29 17：00～））
- ⑨⑱ 演劇「るつぼ」（ジョナサン・マンビイ演出） 10/13（木） 13：00～ シアターコクーン  
（伊藤・三苦）
- ⑨⑲ ミュージカル「リトル・マーメイド」 10/14（夜） 名古屋四季劇場 （磯貝）
- ⑩① ダンス あいちトリエンナーレ 2016 公演「イスラエル・ガルバン FLACO.MEN」 10/16（日）  
13：30～ 名古屋市芸術創造センター （塹江）
- ⑩② ダンス あいちトリエンナーレ 2016 公演「カンパニー DCA / フィリップ・ドゥクフレ CON-  
TACT」 10/16（日） 16：20～ 愛知県芸術劇場大ホール （塹江）
- ⑩③ 映画「栄光のランナー 1936 ベルリン」 10/17（月） ユナイテッドシネマ稲沢ホール （竹本）

- 103 ミュージカル「エリザベート」(東宝版・花總まり主演) 中日劇場 (10/8～10/23)  
(玉崎 (10/18(火) 12:30～)、磯貝 (10/22(土)))
- 104 能「通小町」名古屋能楽堂 10月定例公演 10/21(金) 18:30～ 名古屋能楽堂- (三苦)
- 105 オペラ「ドン・パスクワレ」(沼尻竜典オペラセレクション) 10/23(日) 14:00～ 滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 大ホール (服部・玉崎)
- 106 ダンス「青木涼子 秘密の閨」 10/23(日) 17:15～ 青少年文化センター (塹江)
- 107 演奏・ダンス「小杉武久 MUSIC EXPANDED #2」 10/23(日) 19:00～ 愛知県芸術劇場小ホール (塹江)
- 108 コンサート「レ・ヴァン・フランセ演奏会 管楽器とピアノ合奏」(名古屋クラシックフェスティバル) 10/23(日) 13:30～ 愛知県芸術劇場コンサートホール (伊藤)
- 109 オペラ「ナクソス島のアリアドネ」(ウィーン国立歌劇場来日公演) 10/30(日) 15:00～ 東京文化会館 (塹江)
- 110 オペラ「セミラーミデ」(演奏会形式・藤沢市民オペラ・園田隆一郎指揮・安藤赴美子・妻屋秀和主演) 10/30(日) 14:00～ 藤沢市民会館大ホール (玉崎)
- 111 演劇「あの大鴉、さえも」(小野寺修二演出) 10/31(月) 19:00～ 愛知県芸術劇場小ホール (服部)
- 112 コンサート「ハバネラ・サクソフォン4重奏団Xブルーオーロラ・サクソフォン4重奏団」 11/2(水) 19:00～ 名古屋電気文化会館 (服部)
- 113 能「草薙」(やっとかめ文化祭) 11/3(木) 14:00～ 名古屋能楽堂 (三苦)
- 114 オペラ「ノルマ」(プラハ歌劇場公演・グルベローヴァ主演) 11/3(木・祝) 17:00～ 愛知県芸術劇場大ホール (塹江)
- 115 オペラ「ラ・ボエーム」(藤原歌劇団) 11/5(土) 15:00～ 豊田市コンサートホール [参号館] (玉崎)

- 116 ミュージカル「マーダーパラッド」 11/5(土) 11:00～ 兵庫県立芸術文化センター中ホール  
(服部)
- 117 ブラナー・シアター・ライブ「冬物語」 11/5(土) 20:00～ TOHO シネマズ名古屋ベイシティ  
(伊藤 (11/5)、磯野 (11/4)、服部 (TOHO シネマズ西宮 OS 11/5 17:30～))
- 118 演劇「メトロポリス」 11/8(火) 19:00～ シアターコクーン (伊藤)
- 119 ナショナルシアター・ライブ「War Horse」 11/11(金)～15(火) 18:00～ TOHO シネマズ名古屋  
ベイシティ (服部 (11/11))
- 120 オペラ「ワルキューレ」(ウィーン国立歌劇場来日公演) 11/12(土) 15:00～ 東京文化会館  
(塹江)
- 121 オペラ「フィガロの結婚」(ウィーン国立歌劇場来日公演) 11/13(日) 15:00～ 神奈川県民ホー  
ル (塹江)
- 122 METライブ・ビューイング「トリスタンとイゾルデ」 11/12(土)～ 10:00～ ミッドランドス  
クエア・シネマ (塹江 (11/17))
- 123 「オペラの魅力 Vol.26」(「マノン」「マクベス」等) 11/16(水) 18:00～ 愛知県芸術劇場コンサー  
トホール (塹江・玉崎)
- 124 狂言「名匠狂言会」(「宝の槌」「川上」「二人袴」) 11/17(木) 18:30～ 名古屋能楽堂 (三苫)
- 125 ブラナーシアター・ライブ「ロミオとジュリエット」 11/21(月) 17:40～ TOHO シネマズ名古  
屋 ベイシティ (服部)
- 126 新作能「オセロ Othello」大江能楽堂(京都)日本演劇学会主催 12/3(土) 19:00～  
(三苫・服部・伊藤)
- 127 演劇「虚仮威」(柿喰う客・10周年記念新作) 12/3(土) 14:00～ 三重県文化会館小ホール  
(服部)

- 128 能「富士太鼓」「項羽」(名古屋能楽堂 12 月特別公演) 12/4 (日) 12:30 ~ 名古屋能楽堂  
(三苦)
- 129 オペラ「皇帝ティートの慈悲」(愛知県立芸術大学大学院オペラ) 12/3(日) 14:00 ~、12/4(日) 14:00 ~ 長久手文化の家森のホール  
(磯貝・塹江 (12/3)、玉崎 (12/4))
- 130 演劇「オフェリアと影の一座」(りゅーとぴあプロデュース・白石加代子主演) 12/7(水) 13:00 ~ 兵庫県立芸術文化センター・阪急中ホール  
(服部)
- 131 演劇「ヘンリー 4 世第 1 部」新国立劇場・中ホール 12/10(土) 12:30 ~  
(服部)
- 132 演劇「ロミオとジュリエット」(マーム&ジプシー) 12/10(土) 18:00 ~ 東京芸術劇場プレイハウス  
(服部)
- 133 MET ライブ・ビューイング「ドン・ジョヴァンニ」(F. ルイージ指揮・M. グランデー演出・キーンリサイド主演) ミッドランドスクエア・シネマ  
(塹江 (12/4))
- 134 演劇「キネマと恋人」(ウッディ・アレン原作「カイロの紫のバラ」ケラリーノ・サンドロヴィッチ台本&演出)(世田谷パブリックシアター+KERA・MAP #007・制作) 12/15(木)~12/18(日) 名古屋芸術創造センター  
(玉崎 (12/15)、服部 (12/16))
- 135 オペラ「口はロボットの口」(こんにゃく座公演) 12/17(土) 14:00 ~ 四日市市文化会館第 2 ホール  
(服部)
- 136 コンサート「クリスマス アヴェ・マリア」(サンクト・ペテルブルグ室内楽合奏団) 12/16(金) 18:00 ~ 日進市民会館  
(玉崎・紫)
- 137 演劇「偶然の旅行者」(北村想脚本・鹿目由紀演出) 12/8(日) 11:00 ~ G/PIT  
(服部)

138 2016 年 ロンドン & ストラトフォード観劇演目 (酒井)

1. The Winter's Tale (Shakespeare's Globe (Sam Wanamaker Playhouse))	3/30 (水)
2. Nell Gwynn (Apollo)	3/30 (水)
3. The Tempest (Shakespeare's Globe (Sam Wanamaker Playhouse))	4/22 (金)
4. Twelfth Night (Questor's)	4/23 (土)
5. The Taming of the Shrew (Shakespeare's Globe)	8/ 5 (金)
6. Romeo and Juliet (Garrick)	8/ 8 (月)
7. The Deep Blue Sea (National Theatre)	8/ 9 (火)
8. The Seagull (National Theatre)	8/11 (木)
9. Cymbeline (RSC, Royal Shakespeare Theatre)	8/12 (金)
10. Hamlet (RSC, Royal Shakespeare Theatre)	8/13 (土)
11. Macbeth (Shakespeare's Globe)	8/16 (火)
12. The Two Noble Kinsmen (RSC, Swan)	8/20 (土)
13. King Lear (RSC, Royal Shakespeare Theatre)	8/22 (月)

139 ロンドン & チェスター観劇演目 (玉崎紀子・紫)

1. Musical : Guys & Dolls (Phoenix Theatre)	8/16 (火) 19 : 30 ~
2. Musical : Funny Girl (Savoy Theatre)	8/17 (水) 19 : 30 ~
3. Musical : Half a Six Pence (Chichester Festival Theatre)	8/18 (木) 20 : 00 ~
4. Musical : Show Boat (New London Theatre)	8/20 (土) 19 : 30 ~
5. Drama : The Entertainer (Garrick Theatre)	8/22 (月) 19 : 30 ~
6. Musical : In the Heights (King's Cross Theatre)	8/23 (火) 15 : 00 ~
7. Musical : Kinky Boots (Adelphi Theatre (Yukari))	8/24 (水) 14 : 30 ~
8. Musical : Show Boat (New London Theatre (Noriko))	8/24 (水) 14 : 30 ~
9. Musical : The Go-Between (Apollo Theatre)	8/24 (水) 19 : 30 ~
10. Musical : Jesus Christ Superstar (Open Air Theatre, Regent's Park)	8/25 (木) 19 : 30 ~
11. Musical : The Three Penny Opera (Olivier, National Theatre)	8/26 (金) 19 : 30 ~
12. Comedy : Our Ladies of Perpetual Succour (Dorfman, National Theatre)	8/27 (土) 17 : 30 ~
13. NTLive : One Man, Two Governors (Riverside, National Theatre)	8/28 (日) 19 : 30 ~
14. Drama : The Deep Blue Sea (Lyttelton, National Theatre)	8/29 (月) 19 : 30 ~
15. Comedy : The Truth (Wyndham's Theatre)	9/ 1 (木) 15 : 00 ~
16. Musical : Les Miserables (Queen's Theatre)	9/ 2 (金) 19 : 30 ~
17. Comedy : The Play That Goes Wrong (Duchess Theatre)	9/ 3 (土) 14 : 30 ~
18. Comedy : Hobson's Choice (Vaudeville Theatre)	9/ 3 (土) 19 : 30 ~
19. Musical : Into the Woods (Menier Chocolate Factory)	9/ 4 (日) 15 : 00 ~
20. Drama : Pride and Prejudice (Open Air Theatre, Regent's Park)	9/ 6 (火) 19 : 30 ~
21. Musical : The Groundhog Day (The Old Vic Theatre)	9/ 7 (水) 15 : 00 ~

## ・観劇短評選

### ⑤1 演劇『ロミオとジュリエット』（カンパニーデラシネラ公演） 6/12（土） 豊橋芸術劇場 PLAT

2016 年はシェイクスピア没後 400 年の記念の年ということで、アフターシェイクスピアを意識した企画や上演が多かった。その中で印象的であったのは、豊橋芸術劇場 PLAT アートスペースで演じられたカンパニーデラシネラの『ロミオとジュリエット』である。台詞を最小限にしてマイムの動きを取り入れた舞台はスタイリッシュで飽きることがなかった。パントマイムでキャリアを始めた小野寺修二の率いるカンパニーデラシネラは、これまで博物館や学校の芸術鑑賞教室さらに静岡の街頭でこの作品を上演してきたが、豊橋での上演は劇場版としてバージョンアップされたものである。短評では、小野寺の 2016 年の活躍を追いながら、その演劇世界を現実との関わりから考察してみたい。

芸術鑑賞教室や公共空間での上演ではまず主催者側が企画なり演目を決める。必ずしも一人ひとりの観客が演目を選んでチケット代金を出す訳ではない。この自覚的・能動的でない観客に見せる演目として『ロミオとジュリエット』は適している。「教育的」古典であると同時に、現代日本においてマンガや青春ドラマの劇中劇の定番となるほどに非常にポピュラーであるためである。若者たちが親の許さぬ恋に落ち最後に死ぬストーリーはよく知られているが、この純愛ロマンスを現代人が感情移入して観ることができるか、理解することができるかは不明である。多くの翻案作品は結末のわかっている作品をどう見せるかに工夫を凝らし、それを楽しみに観る見方も存在する。

装置もほとんどなく日の光の下で演じられたエリザベス朝の舞台では、朗々たる台詞を聴くことで観客は状況を理解した。しかし現代人には日本語で語られたにしてもフォローするのが難しいだろう。小野寺は、装置に工夫を凝らすことで役者たちの状況説明を減らし、空間内での登場人物の関係や心の動き、インパクトの強さと方向性を即物的・身体的パフォーマンスと最小限の言葉で見せた。

アートスペースには、中央の空間の三方を取り囲むようにアリーナ状に観客席が設置されているだけであった。舞台空間には直方体の白いブロックがいくつか置かれており、それらが空間を仕切ったり組み合わせで十字架の形になったりして舞台装置の役割を果たす。美術家石黒猛制作による愛らしいミニチュアのおもちゃ、馬、馬車、人形、貴族の館、石膏像や、大道芸人の手回しオルガン風のジオラマ装置が小道具として用いられており、それを観るだけでも心躍ったが、ときおり役者たちの演じている場面が唐突におもちゃの世界にワープした。有名なバルコニーシーンは人形たちによって表象されていたが、突然アートスペース既設のバルコニーに役者が現れ演じ始めた。役者のシルエットが白い壁に大きく映しだされて尊大な父親の存在を表したりもした。上演前には観客の協力が必要であると合図に従って拍手するミニワークショップも行われた。かくして秘密裡に行われた筈の結婚式で恋人たちは観客たちの拍手で盛大に祝福されることになった。当初は観客参加を促す安易なやり方に思われたが、観客を巻き込んでの目出度さの創出は、二人が幸せの絶頂から不幸へと転落していく落差を強調し速度を加速させる。このように舞台空間の拡大や縮小、劇中人物の空間移動や時間の経過がアナログ的に表されて虚と実の境界が揺れ動いた。

印象的だったのは若者たちの喧嘩の場面である。小野寺演ずるティボルトが不遜な笑みを浮かべ、生のキャベツの葉をむしり食べながら登場してくる。乱闘騒ぎの中、彼が真っ赤なトマトを握りつぶすと、果汁が飛び散りトマトはぐちゃっと床に落ちる。マキューシオが殺害されたのである。それを観たロミオは、ティボルトに襲いかかりキャベツを奪うとナイフを何度も突き刺して葉を切り刻んだ。床には散らかった黄緑のキャベツの葉と 原型を留めぬ赤いトマトがあった。若者の死が生々しくリアルに表象されていた。

事件を知ったジュリエットはアートスペース内の四方の扉から出たり入ったりして走り回るが、外には出られない。彼女は抑圧された空間に閉じ込められたままである。卑猥な台詞を語る乳母は劇中で頼りになるがいい加減な存在であるからこそ、ロミオを捨ててパリスを選べと云う。この老婆を演じた藤田桃子が流されて生きる強さと権力に対する弱さを併せ持つ可笑しさを体全体で表し笑いを誘っていた。ジュリエットの死の場面では歌劇『ノルマ』からアリア「カスタディーヴァ」（清らかなる女神）が流れ、最後に役者たちがカラフルなフリスビーを投げ合って終わった。恋愛を貫徹した故に招いた不幸な結末がフリスビーの浮遊感と定まらない軌跡で締めくくられていた。

アフタートークで小野寺は「物語を伝えるよりもワンシーンの印象を残したい」と語ったが、その演出意図はかなり達成されていたように思われた。彼は悲劇の意味内容を言葉で伝えようとしたのではなく観客の興味を失わせることなく結末に至る過程を劇行為で示したのである。終幕のフリスビーの自由な動きは、二人の死は何だったのだろうかという問いを最後に観客に投げかけているように思った。

（服部 記）

### ⑦演劇『艶情 夏の夜の夢』（柿喰う客公演） 8/19（金） 18：45～ ナレッジシアター

柿喰う客の女体シェイクスピアシリーズ第8弾『艶情 夏の夜の夢』を大阪駅に直結した約380席の多目的劇場ナレッジシアターで真夏の昼間に観た。劇場のドアを開ければ真新しい都会の商業施設から異空間へワープできる。名古屋駅の近くにもこのような劇場があれば羨ましく思った。

シェイクスピアの『夏の夜の夢』においてアセンズの宮廷人たちの現実に変容をもたらすのは夜の森を支配する妖精たちとその魔術である。喧噪の夜が明けると喧嘩をしていた妖精の王と女王も結局元の鞘に収まる。また、恋人たちの取り違えとそれに伴う乱痴気騒ぎも一夜の夢と処理されることで、恋愛感情（対象）の回復と変化が受け入れられ、2組のカップルが出来上がる。さらに、シェイクスピアは劇の最後に職人たちによる「ピラマスとシスビー」の劇中劇を置いて、婚礼を寿ぐとともに劇中の現実、つまり虚構を虚構として認めず劇外に及ぶことを恐れる職人たちと、演劇ルールを理解できない彼らを笑い飛ばす宮廷人を描いた。しかし宮廷人もまた心変わりという夢の出来事を現実を引き継ぎ受け入れているのだから、職人を批評しながら自分自身を対象化し笑っていることになる。『夏の夜の夢』は底なし（ボトムレス）の合わせ鏡である。

さて、演出の中屋敷はこのシリーズでシェイクスピア作品を新たな設定に読み替え、特に若い観客を飽きさせずに意表を突く舞台を提供してきた。今回第8弾になぞらえた8人の女優による喜劇の上



演モチーフは「夏祭り」である。原作におけるアセنز郊外の夜の森は、都会の郊外の熱気に満ちた盆踊り会場に置き換えられ、舞台上には提灯の灯る盆踊り会場がセットされていた。しかし昼のアセنزから夜の森への移行に相当する舞台装置の転換はない。

上演パンフレットに拠れば中屋敷は「やまと言葉をリズムカルに使うことで、流れるような詩的なせりふにすること」に取り組み、現代日本ではわかりにくい生や死の概念などが台詞や身体や設定を通してどこまで記憶と結びつき遊べるかをめざしたようだ。恋人たちは浴衣姿であったが、男性役は小柄で可愛い女優が、女性役は背が高くりりしい女優たちが元気に演じた。職人たちは江戸の町民の格好でべらんめえ調で台詞を語り、カンパニーの副代表で看板女優の七味まゆ実は妖精の王オーペロンとシーシアスの妻ヒポリタを、可笑しな大阪弁を交えて演じた。『迷走アントニーとクレオパトラ』で耳にした怪しげな外国人風の日本語も聞こえた。ドタバタ恋愛狂騒劇は登場人物グループ毎の特徴ある言葉と衣装によって、つまり、それなりの様式にそって繰り広げられ、過去の女体シリーズの断片を思い起こさせた。

妖精のバックは従来の上演イメージを裏切っていた。テキスト解釈に拠れば、バックは動作が機敏で変幻自在なトリックスターである。しかし、今回柿喰う客初出演のベテラン女優千葉雅子演ずるバックは、「すぐに」と言いながらゆっくりと動いて、言葉とアクションが一致しない。彼女は、野球観戦に出かけるよう出で立ちのおばさん姿で、クーラーボックスを携えて幕が上がる前から舞台上をうろうろしていた。彼女がバック役であると気づいたのは、場面が開放的な夏祭りの夜、すなわち、夜の森に移ってからである。理性の働かない夜の森は、ボトムという言葉で言えば「人間の知恵を超えた」世界であり、ラブロマンスもコンベンション通りには展開しない。混沌を作り出すのも收拾するのもバックである。中屋敷は千葉バックをシニフィエとシニフィアンとの不一致を体現するばかりか、観客の観劇体験をも宙づりにする役割を与え、恋人たちの取り違えや口バに変身させられたボトムと妖精の女王との情事、職人たちの虚実を混同した芝居稽古を冷やかに傍観させた。夜の森の場面は楽屋落ちの台詞やこれまでの女体シリーズで試みられたモチーフが詰まっている。場面転換と余興劇を省略した『艶情 夏の夜の夢』は、バックを観客に見立てた劇中劇構造を持ち、『夏の夜の夢』を上演しながら、女体シリーズを総括しているのである。

12月に三重県文化会館小劇場で観た中屋敷の新作『虚仮威』は、明治から大正にかけての地主一族の個人史と時代史が、不倫関係にある現代の男女の話とクリスマスイブに交錯する幻想劇だった。女に生まれながら家督を継ぐため男として育てられた人物の物語は、クィアな視点から描かれた中屋敷の「冬の夜ばなし」であり、シェイクスピアの『冬の夜ばなし』同様に、「信じる」ことが鍵となる。それは、虚構を受け入れる演劇体験と通底する。女体シリーズは新たな局面を迎えたと思われる。

(服部 記)



⑧3 人形劇『山ぐるみ人形劇 マクベス』ベビー・ピー公演 9/18(日) 14:00~

損保ジャパン興亜人形劇場ひまわりホール

ベビー・ピー『山ぐるみ人形劇 マクベス』を損保ジャパン興亜人形劇場ひまわりホールで観た。上演チラシにある写真には、役者らしき人たちがポップなぬいぐるみを持って写っている。観劇前にはどのような芝居であるのか想像もつかなかったが、観てみると非常に面白かった。

劇団 HP によれば、京都の劇団「ベビー・ピー」は人形劇団ではない。また、山ぐるみとは美術家山さきあさひこによる手縫い手作りの「ファンシーかつサイケデリック」なオリジナルぬいぐるみのことである。山さきと協同活動を行ってきたベビー・ピーの根本コースケがこの人形をアナログに動かして芝居を作ることを思いつき、これまでに能、狂言、文楽、宮沢賢治、坂口安吾などの原作から独自の世界を作り上げてきたという。

『マクベス』は6人で上演された。それぞれの人形がどの役であるかが定まっている一方で、遣い手は定まっていない。カジュアルな服装の素顔を見せた役者たちが人形を持ち換え、複数の役の台詞を場面ごとに語っていく。ときには人形を持って台詞を語っている役者の声に脇・背後から他の役者が和していく。比較的大きなマクベスの人形でもせいぜい50センチほどなので、役者の身体が存在が圧倒的である。マクベスは複数の声によって語り分けられる。殺害を前に怯えた台詞を語る役者、王となって強がる台詞を語る役者などが場面を演じ分け、多面的多声的にマクベス像が造型された。ダンカン王殺害後の「手についた血潮が海を深紅に換える」という有名な台詞やコミックリリーの門番の台詞など、プロットに直接関係しないがイメージを膨らませ状況説明をする台詞などもほとんど省略されずに語られた。当初役者たちの顔ばかりを見ていたが次第に物語世界に引き込まれ、発話者が次々と変わっていくなかで外見の変わらない人形に焦点を向けるようになった。人形が主で役者が従となり、人形と役者の関係性が変容したのである。

ダンシネインの森が動いたと報告されるシーンでは、後方で小さな木の枝をつけた人形を幾つか動かしていた。ここは外見を偽り自然に逆らったマクベスとその仕返しを受ける象徴的なシーンである。人形劇場は狭いので森が動く仕掛けがよく見える。もう少し工夫がほしいとも思ったが、見せかけを見せるのが人形劇である。二枚舌の魔女の言葉、見えるモノと見えないモノ、不確かな現在と確かな未来を巡るマクベスの物語が、役者と人形の関係性が反転するなかで、声によって語り出された。その語られた世界と眼前の舞台との距離の伸び縮みが興味深かった。

マクベス夫妻の子、帝王切開で生まれたマクダフとその子、バンクォーの子孫など子供が存在/非存在はこの物語の展開において重要な機能を果たしている。ポップな人形で心と身体の在り様を探る『マクベス』を上演したのは慧眼といえるかもしれない。根本コースケは山ぐるみ人形劇に適した作品を選んでいると上演後に語っていた。他の山ぐるみ人形劇も観てみたい。(服部 記)

10月、竹内銃一朗作・ノゾエ征爾上演台本・小野寺修二演出による『あの大鴉、でさえも』を観た。この作品はデュシャンの『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁さえも』(通称大ガラス)にヒントを得て、1980年に竹内の作・演出で上演された舞台であるが、今回アングラ時代の演劇を現代的な視点で読み直す東京芸術劇場の“Roots”シリーズで再演された。

元は3人の男芝居であった。今回小野寺は3人の男たちを片桐はいり・小林聡美・藤田桃子のそれぞれ個性的な女優に演じさせた。彼らは舞台上で目には見えない透明ガラスを押したり引いたりしながら届け先の三条さんの家を探している。「押すなよ。」「押してなんかないよ。」「もう限界だ。玄界灘を越えて後は後悔(黄海)だ。」などという小気味よい台詞の応酬があるが、届け先は発見できず、ほとんど何の事件も起こらない。ガラスは俳優のよたよたする動きや伸び縮みする紐でサイズを自在に変えながらそこに在るようである。上演パンフレットに転載された扇田昭彦による初演批評には、3人の男たちが運ぼうとしている目に見えない大ガラスは、「共同幻想」であり「困難な時代のなかであえて演劇を持続しようとする竹内の意思を読み取ることができる」とある。3人の女優たちは喧嘩を繰り返しながらもバランスを保って大切なモノを持ち続けようとするが、そこに悲壮感や汗臭さは感じられない。時々語られるチェスのルールはコマ相互の動きの関係性がチェスボードという特定空間においてのみ有効であることを教えてくれる。私たち観客は舞台上の日常的な言葉や身体存在とそれらが指示する不在のモノとの関係性を大いに楽しんだのである。

男たちが行きつ戻りつして探すガラスの届け先である三条さんは、路地の行き止まり「山田」という表札の架かった白壁の家である。そこは、かつての童謡歌手三条ハルミの「ハ」(歯?)が抜けてポルノ女優になった三条ルミ、の家で彼女は山田さんと結婚したという。鍵穴から屋敷の中を代わる代わる覗き見て、憧れの元女優が身につけているものを一枚ずつ脱いでいく様子を3人は興奮して語るが、それは妄想に過ぎない。壁の内部にさらなる壁があると言っているからである。見えないものは存在しないのか。存在しないものは見えないのか。プロットらしいプロットを欠く堂々巡りの劇中で白い壁に影や文字が度々映写された。その中には『ゴドーを待ちながら』『彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁さえも』という作品名もあり、それについて簡単に説明もされた。見えないものが存在し、存在しないものが見えるかのように語る男たちの欲望は笑いの対象になるが、崇高なモノに対するパロディでもある。ただ今回の上演が不条理劇や難しい実験演劇と異なるのは、三条ルミの人生が物語として語られ、欲望の対象である彼女の存在も、見えないガラスとともに、舞台上での日常的な言葉の遣り取りと身体動きによって表されていることに拠るだろう。ガラスが簡単に音を立てて割れた後、「三日月」などの月尽くしの言葉遊びが行われ「芝居好き」という言葉に行き着いて劇は静かに終わった。見えないけれど存在している、存在しているけれど見えないことと格闘する役者たちを支えているのが「芝居好き」の姿勢である。観客はわかってもらわなくても楽しんで劇場を後にする。生身の身体と言葉で演劇の虚構/実在と真実の関係性がぎりぎりまで追求されたあとに残されたのは、演劇に対する熱くて深い思いとそれがもたらす軽やかな楽しみであった。(服部記)

130 演劇『オフェリアと影の一座』 12/7 (水) 13:00～ 兵庫県立芸術文化センター阪急中ホール

りゅーとぴあ新潟市民芸術文化会館により企画制作された『オフェリアと影の一座』を兵庫県立芸術文化センター阪急中ホールで見た。ちなみに東京公演は東京芸術劇場で行われた。この作品はエンデの絵本を基に芸術監督の笹部博司が台本を書き、演出に小野寺修二を迎えて制作されている。

公演パンフレットに掲載された笹部の「影の一座から光の一座へ」と題された一文には、「絵本は、無限の思いを見事な架空と比喻によって、描いている。その無限を、俳優という実体を使って舞台の上に作り出す。これは小野寺修二にしか出来ない試みである。」とある。小野寺修二にしか出来ないかどうかはわからないが、経歴紹介に書かれた「マイムの動きをベースに台詞を取り入れた独自の演出で、世代を超えた観客層の注目を集めている」のは豊橋と名古屋で確認済みである。

大きなスクリーンを背景にして舞台中央にいすが一脚置かれていた。いすにスポットライトが当てられると、白石加代子がそこで手にしていた絵本をめくり朗読し始める。どこからか登場した黒衣の男たちがビデオカメラで撮影を始めると、スクリーンに絵本が映し出され、絵本から飛び出してきたキャラクターが舞台上で生き始める。白石加代子の語りに合わせてすぐ横で赤子誕生を喜ぶ両親の姿とオフェリアと名付けられた経緯、長じての俳優修行とその挫折、上演において影の存在であるプロンプターの仕事ぶりが人形や光と影を効果的に用いてマイムで示される。また舞台上に置かれた美しい外観の小さな劇場模型とその前を行き来する役者たちがビデオカメラでスクリーンに投影されると、虚と実の関係性が逆転して役者が巨人になった。このファンタジー作品のメタ演劇的な劇中劇構造が巧みに視覚化されていた。

不況から町の劇場が閉鎖されたとき行き場を失ったのはオフェリアだけでなく俳優たちも同じだった。彼女は俳優の影を鞆に入れて、どこまでも旅を続ける。この影の一座は4人の元タカラジェンヌと出自の異なるパフォーマーたちで構成され、『トゥーランドット』『オンディーヌ』を劇中劇として上演した。西宮という土地柄もあって、会場に多くいた宝塚ファンには往年の男役スター朝吹真央がカラフを演じ歌う場面はたまらなくうれしかったに違いない。白い布を揺らすことで表象された幻想的な水の世界ではオンディーヌを演じた白石が恥じらう乙女に見えた。フィリップ・エマルによって簡単なフランス語で影の一座の司会進行がなされていたが、この興業はフランス語がわかってもらわなくても楽しめる異空間であった。それはまた小野寺のマイムの世界につながる。

一座を乗せた車が前に進まなくなったとき、釜を持った死神のシルエットが表れる。オフェリアは「あなたがこの胸のボタンを外してくれるのね」とリア王の最期を連想させる台詞をやさしく語る。厳しい現実の中で、誰もが脚光を浴び思うように生きられるわけでもないが、影の一座と芝居を続けることができ自分は満足であったと死を迎え入れる。エンデのこの作品は大人のファンタジーである。空想の世界に遊ぶことは人生を豊かにし社会を活性化もする。これは文芸や演劇など文化芸術の存在意義の一つであり、そこに人を巻き込んでいく装置や機会を提供することが現代社会にあって公的な課題である。影の一座は公共劇場の夢のかたちでもある。

カーテンコールで光を浴びて輝く白石を観て、公僕から演劇の世界に入ったこの人もまた満足いく

日々を送っているのだだろうと想像した。その横で、「今みんなが演出してもらいたいと思う人」と白石にステージ上に呼び出された小野寺が体を直角に曲げてぴょこんとお辞儀をした。少年のようなきびきびとした動きと正面を見据える姿勢が作品世界に反映していると思われた。（服部 記）

<sup>134</sup> 演劇『キネマと恋人』 12/16(金) 19:00～ 名古屋市芸術創造センター

12月16日世田谷パブリック劇場が制作した『キネマと恋人』を名古屋芸術創造センターで観た。この作品はウディ・アレンの映画『カイロの紫のバラ』にヒントを得てケラリーノ・サンドロヴィッチが舞台化したものである。時代と場所の設定は異なるが、現実がつらくて映画を観るしか楽しみのない女性の元にスクリーンからスターが飛びだして引き起こす大混乱とその結末が共通の設定である。観客席と舞台の双方向性がある演劇と異なり、映画においては「観客は映画の進行に影響を与え得ない。映画中の人物も観客を感じることはない。」<sup>(注)</sup> アレンは映画において「双方向性」というあり得ない設定を映画の世界に持ち込んでスクリーン上の恋人と映画好きな女性とのラブロマンスを制作した。これをケラは双方向性が可能な演劇に書き換えて上演した。映画の劇中上演もあり現実と虚構の関係性がより複雑・煩雑になった。場面転換も多くて上演時間も長くなった。小野寺はこの作品の振付で制作に参加したが、ダンサーを用いて舞台装置を動かす洒落た場面転換や、映像と連動してスクリーンに出入りする役者の動き、伸び縮みする白い紐を用いた室内空間の創出などに客席は驚き沸いた。舞台空間における虚と実の境界が揺れ動くさまを示したこの上演で小野寺の貢献は大きい。

2016年公共劇場で企画制作された作品の多くに小野寺は関わっていた。彼の作品は身体表現をベースに、最小限の言語表現や映像小道具などなど多様なメディアやスタイルを用いて虚実皮膜のあわいで遊んでいるため観客は興味を引く様々な視点から作品を観ることができる。また、説明的でないため解釈の自由度も高く満足度も高くなるだろう。舞台芸術をいろいろな階層の人々に紹介・提供するのに彼のスタイルは敷居が低く有効であると特に公共劇場の制作者側が判断するのも当然と思われる。台詞が少なければ舌鋒鋭い政治批判もあからさまな政治的発言も少なくなるが、それもひょっとしたら好まれる理由であるかもしれない。

(注) 安藤隆之『ヨーロッパ演劇の形』中京大学文化叢書2、2001年、11頁)

(服部 記)

今年は3月、4月、8月とそれぞれ短い時間ではあったがイギリスを訪れる機会があった。

3月には Shakespeare 劇を一本、Jessica Swale の新作を一本、4月には Shakespeare 劇を2本、8月は Shakespeare 劇を8本、現代劇を2本、相変わらず Shakespeare 劇を中心とした観劇となった。

3月にはロンドンに滞在したわずか1日の内に、Sam Wanamaker Playhouse で、Shakespeare の *The Winter's Tale* をマチネーで観て、夜は Apollo Theatre で Jessica Swale の *Nell Gwynn* を観た。

*The Winter's Tale* の要諦は、この作品の粉本 Robert Greene の *Pandosto* では、王子の急死を知って悶死する王妃 *Hermione* が蘇ることはないのに対して、彼女が蘇生することにある。劇中人物たちにも観客にも死んだとばかり思われていた *Hermione* の像が動き出す最後の場面は、そこに Shakespeare の再生への思いが込められていて、いつ見ても心動かされるが、この劇場の閉ざされた空間で演じられると、この感動がなお一層凝縮されたように感じられた。突然の嫉妬に囚われて、妻も愛児も友人も失った *Leontes* の苦悩を描く劇前半もこの閉ざされた空間で演じられるにふさわしい。一方で、劇後半の、若者を中心に祝祭的に演じられる明るいポヘミアの世界は、この劇場の狭い舞台では描ききれないと思った。この劇場は天井からつるされた7つの燭台の蝋燭だけが照明だが、蝋燭が一部消されて、薄暗い中で上演されると演出効果が増す場面もあるが、*Antigonus* が *Leontes* の命令で嬰兒 *Perdita* を捨てた直後、熊に襲われる場面では、舞台がほぼ真っ暗になり、舞台上で何が起きているか分からなかった。演出は Michael Longhurst。彼は、この劇場が創設された2014年のセカンド・シーズンで John Ford の *'Tis Pity She is a Whore* を演出して成功を収め、今回は2度目の登板である。今年の10月には National Theatre で Peter Shaffer の *Amadeus* を演出することになっている今注目の演出家である。昨年、*Evening Standard* 紙も「もっとも影響力のあるロンドン人1000人」の中に Longhurst を選出している。今回 Longhurst を起用したこの劇場の芸術監督 Dominic Dromgoole が今年3月で辞任し、Emma Rice が新たに芸術監督になった。初代芸術監督 Mark Rylance と共に、Shakespeare を現代の観客に近い存在にした Dromgoole の功績は大きい。これまで Shakespeare の作品は *Cymbeline* しか演出したことのない Rice が、どのように Shakespeare's Globe を導いていくのが注目される。

Jessica Swale の新作 *Nell Gwynn* は昨年秋に Shakespeare's Globe で初演された。*Nell Gwynn* は Drury Lane のオレンジ売りであったが、Charles Hart に見いだされて、役者としての訓練を受け、国王 Charles 世によって女性が舞台に立つことが初めて許された時、イギリス人最初の女優となった人物である。彼女が女優になることをバックアップしたのは、座付作家の John Dryden と演出家の Thomas Killigrew であった。Charles Hart と Nell とは恋人となるが、国王 Charles 世が、Nell の舞台を観て、たちまち彼女に魅了され、彼女を愛人にしようとする。二人は密会を重ね、そのことで Nell と Charles Hart とは別れることになる。王宮に移り住んだ Nell は、王妃



Catherine や国王の昔の愛人や廷臣 Arlington からの嫌がらせや、国王の新しい愛人の出現や、実母の死など苦しい体験を経ながらも、国王 Charles 世との幸せな日々を送るが、突然の Charles 世の逝去によって王宮を去らざるを得なくなり、劇場へと戻っていく。Charles Hart とも和解して、Nell は再び舞台に立ち、Dryden の Tyrannick Love に出演する。Shakespeare's Globe での初演の時、Nell Gwynn を演じたのは Gugu Mbatha-Raw であった。彼女はイギリスで生まれ、イギリスで教育を受けたが、父親が南アフリカ人、母親がイギリス人で、外見からも、混血であることが分かったために、心ない劇評子が、Mbatha-Raw が生粋のイギリス人 Nell を演じることに異を唱えるという時代錯誤の拳に出た。彼女は「私は Juliet も Ophelia も演じたことがあるが、私がイタリア人でない、デンマーク人ではないからこの 2 人を演じるのはおかしいと言われたことはない」と反撃して、話題になった。Mbatha-Raw はこの時の演技で Evening Standard 紙の主演女優賞にノミネートされた。今年は劇場をウェストエンドの Apollo Theatre に移して続演された。今回 Nell を演じたのは Gemma Arterton である。Arterton と言えば、Sam Wanamaker Playhouse の柿落として上演された The Duchess of Malfi で Malfi 公爵夫人を演じた女優である。兄たちの反対を押し切って、下僕との身分違いの結婚をする公爵夫人を情熱的に演じて大好評であった。Arterton は今回もイギリスで最初に舞台に立った女優 Nell を華やかに澁刺と演じていた。上演そのものが Arterton の演技に支えられていたと言ってもよい。Lawrence Olivier Award の主演女優賞にノミネートされたが、惜しくも賞は逸した。イギリスで舞台に最初に乘った女優と言えば、一昨年映画から舞台化された Tom Stoppard と Marc Norman の共作 Shakespeare in Love に登場する Viola が思い浮かぶ。Viola の方が時代的には古いとはいえ、虚構の人物なのだから、舞台女優第 1 号と言えば、当然 Nell Gwynn を指すが、実はこの二つの作品には、女優としての Viola と Nell をはじめとして、座付作家としての Shakespeare と Dryden の存在、彼らを取り巻く舞台人の世界など、類似点がいくつもある。Jessica Swale は Shakespeare in Love のヒットに触発されて、Nell Gwynn を書いたのではないかと思われる。作品の面白さも評価されて Laurence Olivier Award の Best New Comedy 賞を受けた。

4 月 23 日といえば、Shakespeare が生まれた日でもあり、亡くなった日でもある。この日を 17 年ぶりにロンドンで迎えた。Shakespeare が亡くなったのは 1616 年だから、今年は没後 400 年の記念すべき年である。生誕地ストラットフォード・アポン・エイヴオンでもロンドンでも様々な記念行事が執り行われた。ストラットフォード・アポン・エイヴオンでは、毎年恒例の 1000 人を超える各界の人々による Birthday Procession に加えて、Royal Shakespeare Company と BBC 共同制作の The Shakespeare Show が Shakespeare Theatre で開催された。David Tennant の司会で多くの Shakespeare 関係者が Shakespeare の誕生を祝い、彼の残してくれた芸術的遺産を称賛した。Show の中で、Charles 皇太子が舞台に上がり、Hamlet の独白の一部を語って、拍手喝采を浴びた。Show の一部始終は BBC2 でイギリス中にライブ放映された。The Shakespeare Birthplace Trust はシェイクスピアが晩年を過ごした屋敷 New Place の 8 月公開を目指して、整備を行った。たまたま 8 月

の公開初日にストラットフォード・アポン・エイヴォンに滞在していたので、新しく整備された New Place に入り、Shakespeare を偲び、彼の生きていた時代へ思いを馳せることができた。ロンドンでは、23 日から 24 日にかけて、Shakespeare's Globe が主催した The Complete Walk と銘打った催しが行われた。テムズ川南岸、ウェストミンスター・ブリッジからタワー・ブリッジまでの 2.5 マイルに亘って、37 の大型スクリーンが設置され、世界の様々な場所でこの企画のために制作された Shakespeare 37 作品のそれぞれ 10 分間の映画が上映された。たとえば、Richard はロンドン塔で、Henry はロンドンのジョージ・インで、Othello はキプロス島で、Hamlet はデンマークのエルシノアで撮影された。すべてを見て歩くと 6 時間以上かかることになるが、そのうちのいくつかを見て、10 分間で表現されたそれぞれの劇のエッセンスを楽しんだ。British Library では“Shakespeare in 10 Acts”というタイトルの展覧会が開かれた。Shakespeare と同時代の様々な文書、彼の作品の初版本から始まって、現代にいたるまでの Shakespeare に関わる 200 以上の資料が展示され、この 400 年間の Shakespeare の歩みをたどっている。新しい発見と言えるものはなかったが、Shakespeare がこの国と世界とで果たしてきた文化的な役割の大きさを概観することができた。規模は小さいが、London 大学 King's College でも“By me William Shakespeare : A life in writing”という展覧会が開かれた。私の友人の劇作家 Tony Giggie は Shakespeare 没後 400 年のこの年に A Kingdom for a Stage を発表した。本人の言によると、Shakespeare が現代にやってきて、その変貌ぶりに驚き、現代を批判するという内容の comedy だそうだ。ロンドン市内の Chelsea Theatre で上演されたのが帰国後の 4 月末から 5 月初めだったので、観ることはできなかった。

この 4 月のロンドン滞在中に、Sam Wanamaker Playhouse で The Tempest を、ロンドンのイーリングにある Questors Theatre で Twelfth Night を観た。

The Tempest の演出は Dominic Dromgoole。今回の演出はこれを最後に Shakespeare's Globe の芸術監督を辞す Dromgoole にとっての「白鳥の歌」である。この 11 年間の Dromgoole の活躍には目を瞠るものがあった。ロンドンオリンピックの年には、世界各地から劇団を招聘して、Shakespeare の 37 の作品を 37 か国語で上演したり、Hamlet を携えて世界行脚を試みたり、2014 年には Shakespeare の時代の屋内劇場 Sam Wanamaker Playhouse を復活させたり、今年は Shakespeare 全作品の短編映画上映を試みたり、彼がこの劇場に対して果たした貢献は計り知れない。Dromgoole は Shakespeare's Globe での最後の演出を Shakespeare 最後の作品 The Tempest で仕上げたいと思ったのかもしれない。Ariel を女優に演じさせたり、Caliban を黒人俳優に演じさせたりといった新しい試みはあったが、全体としては、明瞭な特色が感じられず、彼の「白鳥の歌」にしては物足りなかった。Trinculo と Stephano が登場する場面は確かに面白いのだが、Dromgoole の喜劇の演出の力は、この閉ざされた Sam Wanamaker Playhouse よりも青天井の Shakespeare's Globe の方が発揮されるのではないだろうか。

Questors はロンドンの西、イーリングにある素人劇団である。素人劇団とはいえ、その組織の充実ぶりには驚かされる。1929 年に創設され、2014 年現在、会員数は 1,344 名、うち 300 人が役者として舞台に立ち、200 人が裏方として活躍している。現在の会長 Judi Dench の名を取った Judi

Dench Playhouse という収容数 350 人ほどの張り出し舞台の劇場を持っている。非常にゆったりとした大変に居心地の良い劇場である。そのほかに、100 人の観客を収容する Studio と 3 つのリハーサルルームが併設されている。年間 20 ほどの作品を上演しているという。このような素人劇団がイギリス中に存在していて、イギリスの演劇文化を支えているのだと思う。上演された Twelfth Night は 1 時間半ほどに短縮されていて、Shakespeare の台詞がだいぶカットされていたが、役者も素人と思えないほど巧く演じていて、8 割ほど客席を埋めた観客と一緒にこの喜劇を楽しんだ。

夏のイギリス滞在中、ロンドンでは Shakespeare's Globe で The Taming of the Shrew、Garrick Theater で Romeo and Juliet、National Theatre で Terence Rattigan の The Deep Blue Sea、同じく National Theatre で Anton Chekhov の The Seagull、一泊でストラットフォード・アポン・エイヴオンへ出かけて、Royal Shakespeare Company の Cymbeline と Hamlet、ロンドンに戻って Shakespeare's Globe で Macbeth、再度ストラットフォードへ移動して RSC の The Two Noble Kinsmen と King Lear の 9 本を観ることができた。

フェミニズムの現代にあって The Taming of the Shrew を上演するのは難しい。じゃじゃ馬の Katherine が Petruchio によって貞淑な妻へと変貌を遂げることに現代の観客が違和感をもつ可能性があるからである。たまたま来合わせた貴族たちが、路上で酔いつぶれている鋳掛屋 Sly を屋敷に連れ帰り、彼を即席の貴族に仕立て、その眼前で旅役者の一座に「じゃじゃ馬馴らし」を演じさせるという、いわば劇中劇が、この作品の中心になっているのだが、Sly に Petruchio を演じさせることで、この劇中劇そのものが、Sly の見た夢であったとする演出がこれまで何度も見られた。夢ならば、そこで何が起きようと、夢なのだからと言い逃れができるわけだ。今回の演出では Sly が全く登場しない。その代りに、劇が始まると一人 Katherine が登場し、アイルランド風の「自由」を讃えるバラードを歌う。Katherine が退場すると「劇」が始まる。演出の Caroline Byrne は舞台の設定を 1916 年（ちょうど 100 年前）のアイルランドとした。イタリアへの言及はすべてアイルランドに変えられ、登場人物の語る英語もアイルランド訛りである。1916 年と言えば、アイルランドのダブリンで、イギリスからの独立のきっかけとなった「復活祭蜂起」が起きた年であり、男女同権を認めた The Bill of Rights が発布された年でもある。1916 年のアイルランドに舞台を設定した Byrne の演出意図は何だったのだろうか。これまで見た The Taming of the Shrew のどれよりも、今回は、Petruchio が強権的であり、Katherine が酷く虐待されていた。最後の「妻たるものはかくあるべし」と Katherine が語る説教が実に弱々しく、自らの思いを語っているというよりは、語らされているという印象を受けた。この説教の背後に、自由と男女同権を希求する Katherine の声にならない声を聴いたような気がした。この劇を見終わった後いつも感じていた何かしら居心地の悪さをこの上演では感じなかった。この劇を現代の観客が受け入れられるようにと Byrne が考えた演出が、1916 年のアイルランドという舞台設定であった。納得のいく The Taming of the Shrew を観た気がした。二人の下僕、Tranio と Grumio が女性によって演じられていたが、その演出意図は分からなかった。

Garrick Theatre で、Kenneth Branagh が、自ら主宰する Kenneth Branagh Theatre Company



を使って、Romeo and Juliet を演出した。Branagh 演出の Romeo and Juliet と聞いて大いに期待して出かけたが、これといった特色が感じられず、面白くなかった。運命に翻弄される二人の若き恋人は、Branagh が 2015 年に監督したディズニー映画 Cinderella で王子とシンデレラを演じた Richard Madden と Lily James が演じる筈であった。二人とも今イギリスで人気上昇中の役者である。Madden が病気で降板、代役が立った。Madden と James の新鮮だと評判の Romeo と Juliet を残念ながら観ることはできなかった。Madden の代役は魅力に欠けていた。舞台は 1950 年代のヴェロナ。白と黒を基調とした近代的な舞台装置で、何枚ものパネルの壁が前後左右に移動して、素早く場面を転換していた。バルコニー・シーンでもこのパネルが移動してあっという間にバルコニーが作られるが、何故かしら、バルコニーの高さが地上からわずかに上がっているだけで、ジュリエットとロミオがほぼ同一平面に立って愛を語り合っていた。ジュリエットの手にはシャンパンのボトルが握られ、ジュリエットの激情がアルコールのせいだとも言いたげであった。役者の中で上手だと思ったのは Derek Jacobi と乳母役の Meera Syal だけであったが、老年の Jacobi が演じたのは Romeo の親友のはずの Mercutio で、この演出では親友というより Romeo の叔父といった風情であった。Mercutio は劇の半ばで殺されてしまってその後は登場しない。Jacobi もその後一度も登場しない。カーテンコールにも出てこなかった。彼だけは別格の存在なのであろう。

National Theatre の Lyttelton で Terrence Rattigan の The Deep Blue Sea を観た。ヒロインの Hester Collyer を演じたのは Helen McCrory、演出は Carrie Cracknell である。McCrory と Cracknell といえば、2 年前に Medea でいくつもの賞を獲得した女優と演出家である。今年は、再び組んで、Rattigan に挑戦した。1936 年の French without Tears 以来 20 年ほどは Rattigan の作品は高い評価を受けていたが、その後 John Osborne, John Arden, Arnold Wesker ら社会派の作品がもてはやされて、Rattigan は表に出てこなかった。彼らの作品が現在あまり上演されなくなったのに対して、再び Rattigan が注目されている。今回の The Deep Blue Sea の上演もその一環である。高等法院の裁判官という社会的身分のある夫 William のもとを去って、若き元空軍パイロット Freddie Page のもとに走ったものの、Freddie の愛も失い、拳銃の果てに、ガス自殺を図るが、果たせず、夫と愛人のどちらにも (between the devil and the deep blue sea) 自分の居場所を見いだすことができずに主人公 Hester は苦悩する。同じアパートの階上に一人孤独に生きる元医師 (医師の資格を失った) Miller の助言を得て、Hester は絵の才能を生かし一人生きていくことを決意する。McCrory は、Medea のときほどエネルギーではないが、苦悩するヒロインを見事に演じた。劇の最後、二人の愛児の遺体を両肩に担いで夫 Jason のもとを去っていく Medea の姿と、夫と愛人のもとを去って一人生きていこうとする Hester の姿が重ねあわされる。Cracknell が Medea と The Deep Blue Sea の二つの作品で描きたかったのはそのような女性の生き方であったと思う。

同じ National Theatre で Anton Chekhov の The Seagull を観た。昨年 Chichester Festival で上演されたが、今回 National Theatre の Olivier Theatre に移された。“Young Chekhov” と銘打って、Chekhov 初期の 3 作品 Platonov、Ivanov、The Seagull が同日に一挙に上演された。それぞれ午前 11 時 40 分、午後 4 時、午後 8 時の開演で、3 作を見ると 8 時間かかる。同日の一挙上演は数日

しか行われなかったので、切符の入手は困難であった。それぞれの作品が1日1回上演される日があり、The Seagull だけ観ることができた。National Theatre の舞台はいつも豪華である。舞台が広いので立派な装置で埋め尽くさないと間延びしてしまうのかもしれない。この公演でも、舞台中央には実際に水を張った池が作られ、池の端には Konstantin が自作の劇を恋人 Nina に演じさせる東屋が立てられ、舞台の右手には Sorin の屋敷、左手には Konstantin の書斎が作られている。劇は最初から最後までこの舞台装置の中で進行する。モスクワに出て女優を目指したもののうまくいかず、Trigorin との間にできた子供にも先立たれ、今は地方回りの旅芸人になった Nina が、新進作家として注目されるようになった Konstantin を、人目を避けるようにこの池の中を通りずぶ濡れになりながら訪ねてくる。この Nina が題名の「カモメ」なのだが、Trigorin の言うように「カモメのように自由に幸せに暮している」はずの Nina が夢破れ落ちぶれながらも「私はカモメ」と Konstantin に何度も語る。かつてカモメを撃ち落とし「今に僕はこんなふうに自分を撃ち殺すのさ」と言っていた Konstantin は本当に銃で自らの命を絶ってしまう。Nina のみならず Konstantin も「カモメ」なのではないか。それだけではない、登場人物の大半がカモメのように自由に暮らしているように見えて、何らかの意味で自由を奪われ、重荷を背負って生きている。そのことを改めて深く思わされる舞台であった。一つだけ気になったことがあった。Trigorin が Arkadina からモスクワ行きを迫られた時、観客に向かって、「困ったな、どうしよう」とでも言いたげに、ニヤリと笑いかけた。終始リアリズムに徹していた舞台の中で、この瞬間だけが浮いて見えた。

ロンドン滞在中に、ストラットフォード・アポン・エイヴオンの RSC による Hamlet がラスト・パフォーマンスの日を迎えた。どうしても観ておきたくて、最終公演のチケットを入手し、前日からストラットフォードに向かった。その日は夜 Cymbeline を観て、翌日のマチネーで Hamlet を観ようという計画である。十分な時間的余裕をもってロンドンを出たのだが、高速道路で大渋滞に巻き込まれ、バスがストラットフォードに着いたのは Cymbeline 開幕の直前、劇場まで走ってやっと開幕に間に合った。

演出家は自分の演出に何らかの主張を持たせるためにどうしたらよいのかを常に考えている。Cymbeline を演出した Melly Still は古代イギリス国王 Cymbeline を女王に変え、王女 Innogen にとっては継母にあたる王妃を Duke に変えた。行方の分からない二人の息子を探し求める母としての女王の姿を、自分の息子 Cloten を王女 Innogen と結婚させて国家権力を掌握しようとする父親としての Duke の姿を、それぞれに託そうとしたのか、その意図が明瞭に伝わってこなかった。この作品が上演された5月初旬はイギリス中がEU脱退をめぐる国民投票の議論で沸き立っていた時である。Cymbeline の中でローマへの朝貢を拒否したイギリスと、EUから脱退しようとするイギリスとを重ね合わせようとする意図もあったようで、Previewの段階では、舞台上にEUの旗を持ち出す場面もあったが、正式に上演が始まるとその場面は削除されたという。原作では男性なのに女性に変えたのは Cymbeline にとどまらず、行方不明の Cymbeline の息子二人の内、一人は娘に変えられ（非常に戦闘的な娘で、Clotenの首をはねたのは彼女であった）、Posthumusの召使い Pisanio も女性、占い師も女性であった。登場人物がイタリア人だとイタリア語で、フランス人だとフランス語で語り、

その都度舞台後ろのスクリーンに英訳が映し出され、この作品の国際色が強調される。もともと Shakespeare の原作では誰が主人公なのか分からないほどにプロットが複雑である。秘密裡の結婚、裏切り、不信、嫉妬、異性装、殺人、復讐などなどシェイクスピア劇の要素が複雑に絡み合っている。その上に、今回の演出によって、セクシュアリティの問題、国際性、さらには現代の政治性までもが盛り込まれている。そのために、どこに演出の焦点があるのかが分かりにくくなっていて、観終わったとき、全体として散漫な印象を受けた。

翌日の Hamlet は今夏観た劇の中で最も興味深かった。1961 年創設以来、RSC55 年の歴史のなかで、主人公 Hamlet を黒人が演じたのは今回が初めてである。演じたのは 25 歳のほとんど無名と言ってよい Paapa Essiedu である。Hamlet だけではない。劇の主要人物のほとんどが黒人である。ここはデンマークではなく、現代のアフリカのどこかの王国という設定なのだ。劇場に入ると、舞台には天井から Wittenburg University と書かれた幕が垂れ下がり、その下には演説台が置かれている。舞台の上には、演説台に向けて椅子がいくつか置かれている。今日は Hamlet の卒業式なのだ。卒業生が着席しようとする、突然の爆撃音。その音で舞台が暗転し、劇が始まる。こうして、劇が始まる前から、Hamlet の身にこれから降りかかる苦難が暗示される。Hamlet は大学を卒業したばかりの若きプリンスである。Essiedu は、この若い Hamlet の若さゆえの潔癖さ、苦悩を見事に演じ、説得力のある Hamlet 像を作り上げた。「8 年前この劇場で Hamlet を演じた David Tennant に匹敵する」「間違いなく 5 年後には大スターになっている」といった評価も現れた。冒頭、Hamlet の前に現れ復讐果たせと迫る父親の亡霊は、甲冑ではなく、ケンテと呼ばれるガーナの民族衣装をまとっている。威風堂々とした体躯の黒人女優が演じる Gertrude、鳴り響くアフリカのドラムなどなど、何もかもがアフリカで、最初は違和感を抱いたが、観ているうちに、その違和感もなくなり、すっかり劇世界へと引き込まれていた。黒人が演じようが、白人が演じようが、観客にとっては何の障害にもならないことが実感された。昨年この劇場で Othello を演じたガーナ生まれの黒人俳優 Hugh Quarshie が、上述の British Library での展覧会 “Shakespeare in 10 Acts” で、「あの Othello のなかで Iago を黒人俳優が演じたことに対して毀誉褒貶があったが、芝居は、たとえ Shakespeare が書いたものであれ、歴史的な記録文書ではないのだから、現代に生きる我々が、その作品を生かしながら、どのように演じて、たとえば黒人が演じて、何の問題もないのだ」という趣旨のことを、展示されたインタビュー・ビデオの中で、語っていたのが思い出された。しかし、演劇は視覚芸術でもあるので、ラジオドラマであれば聴き手が想像力を働かせてそれぞれの舞台を思い浮かべればよいが、実際の舞台では俳優が視覚的にどう観客にとらえられるかも大きな要素になる。Hamlet 一人が黒人俳優の場合と、この演出のように登場人物のほとんどが黒人俳優の場合とでは、当然事情が異なる。問題は黒人俳優を使うことでどのような効果、変化が生まれるかだと思う。黒人俳優が Iago を演じることで、もともと黒人の Othello と Iago の間に新しい関係が生まれるし、白人部隊の中の旗手としての Iago の位置にも変化が起きるはずだ。かつて蜷川幸雄が『オイディプス王』を演出した時、日本人俳優の中に一人だけイオカステをギリシャ人に演じさせ、台詞も彼女だけギリシャ語で語らせたことがあった。イオカステが登場すると舞台が急に緊張するという面白い効果が生まれた。

今回の Hamlet の演出では、ある黒人国家が想定され、そこで起きる悲劇が演じられ、黒人特有のエネルギーに満ちた新しい Hamlet が誕生した。「黒人俳優が Hamlet を演じるのは初めて」という表現そのものが時代錯誤なのかもしれない。それにしても、ロンドンでもここストラットフォードでも、黒人俳優が舞台に登場することが多くなった。しかも演技が上手だ。これまでにない Hamlet を堪能した。

ロンドンに戻って、Shakespeare's Globe で Macbeth を観た。演出は昨年 RSC で Othello を演出した Iqbal Khan、上述した黒人の Iago を採用したのは、この演出家である。今度も何か新しいことを見せてくれるのではないかと、期待して出かけた。ここでも Khan は主要な登場人物 Macbeth、Banquo、Macduff の 3 人を黒人俳優に演じさせた。そのことで何を狙ったのかははっきりしなかった。さらに Khan は魔女を 3 人から 4 人に増やした。4 人にしたのに、“When shall we three meet again?” という台詞はそのまま残した。これはどうしたことだろうか。コミック・リリーフとして有名な「門番の場」を演じる Porter には女優を配した。次期米大統領 Trump や EU をめぐる Referendum に言及しながら、観客を楽しませたが、女優を使った意図は伝わってこなかった。Khan が試みたことがもう一つある。Macbeth の子供を舞台に乗せたことだ。Macbeth 自身は自分の子供のことに一度も言及していないし、Macbeth に妻も子供たちも殺害された Macduff は「やつには子供がいないのだ」と言っている。一方 Macbeth 夫人は「私は赤ん坊を育てたことがあります。自分の乳房を吸う赤ん坊がどんなにかわいいか知っています」と言う。Macbeth 夫妻には子供がいたのか、いなかったのか。これは長い間議論されてきた問題である。Khan は Macbeth 夫妻には子供がいたと設定したのだ。これまで Macbeth 夫妻の子供が舞台に出る演出は観たことがない。いくつかの場面で、ちょこちょこ歩き回るのだが、最後、新たなスコットランド王となった Malcolm が玉座に座ろうとすると、この子供がすでに座っている。登場人物たちにはこの子供は見えていない。Malcolm が玉座に座る直前に、子供は立ち上がって姿を消す。いずれ Macbeth の子供がスコットランドの王位を継ぐことになるという含意なのであろうが、実際にはそうならないのだから、何故 Khan がこのような演出をしたのかわからなかった。期待して観に行っただけに、今回の Khan 演出には落胆した。「今まで見た Macbeth の中でも最悪のものだ」という酷評も現れた。

再びストラットフォード・アポン・エイヴオンに移り、Swan Theatre であまり上演されることのない Shakespeare と John Fletcher の合作 The Two Noble Kinsmen を、Shakespeare Theatre で King Lear を観た。

1986 年に Swan Theatre は The Two Noble Kinsmen で開場し、30 周年にあたる今年、同じ The Two Noble Kinsmen でこの劇場の誕生を祝ったことになる。原作は Chaucer の“The Knight's Tale”で、それに牢番の娘の片思いの恋が付け加えられている。Shakespeare が 1 幕と 5 幕を書き、残りを Fletcher が書いたと言われている。固い友情を誓い合った二人のテーベの若者 Palamon と Arcite は、アテネとの戦いに敗れ、囚われの身となる。牢屋の窓からたまたま目にした Emilia (国王 Theseus の妻 Hippolyta の妹) を、二人同時に愛してしまう。Emilia をめぐって、Palamon と Arcite は敵愾心を燃やし、とうとう二人は決闘することになる。Palamon が勝利して Emilia と結



婚することになるが、その直後、Palamon は落馬して死んでしまう。死ぬ直前に Palamon は Emilia を Arcite に託す。何とも安直な劇の終わり方で、これまであまり上演されてこなかったのも分かる気がする。救いは Palamon を演じた James Corrigan と Arcite を演じた Jamie Wilkes の熱演であった。ほかの役者たちは、これで RSC なのか思ってしまうほどに、レベルが低かった。衣装もあまりに現代的でこの作品にそぐわないと思った。初めて観る劇だったので楽しみにしていたが、残念ながら少しも楽しめなかった。

今夏最後の観劇は King Lear である。Lear を演じるのは Antony Sher、演出は Sher の長年の私生活上のパートナーでもあり（二人は 2015 年に正式に「結婚」している）RSC の芸術監督でもある Gregory Doran となれば、期待は否が上にも高まる。一昨年の Henry の Falstaff、昨年の Death of a Salesman の Willy Loman、そして今年の King Lear と、このところ Sher の RSC への貢献はたいへんに大きい。Sher は 1982 年に King Lear の Fool 役で RSC デビューを果たしたが、今回は Lear を演じるようになった。Sher が Lear を演じるのは今回が初めてである。劇場へ入ると、すでに何人もの役者が黒の服を纏い舞台の上で蹲っている。シェイクスピアの時代には多くの浮浪者が町のいたるところにいたという。劇が進行して荒野のシーンで Lear が Edgar 扮する Tom の洞穴に入ると、そこにも Edgar だけではなく、多くの浮浪者がたむろしている。この劇が貧富の差が明らかになりつつあったエリザベス朝の現実を背景に演じられることになる。Doran は、元来は古代ブリテンの王の物語を題材にしたこの劇に、シェイクスピアが全く触れていない彼の時代の経済的現実を取り込んで、この劇に新しさを吹き込もうとしているようだ。劇が始まると、ガラス張りの玉座に座った Lear が何人もの廷臣によって運ばれてくる。まるでガラス張りのショー・ウィンド - の中に飾り立てられて、人の目を引かんばかりの Lear が語り始める。Sher は、Falstaff や Willy Loman を演じた時とは全く違う、周囲の人々を睥睨する、威厳に満ちた Lear を堂々と演じる。これほどに威厳に満ちた Lear は今まで見たことがない。この Lear を見られただけでも価値があると思えるほどであった。とたちまち、Lear は、権力者であるが故に、権力におもねる者に対しては耳を傾けるものの、少しでも楯をつく者の声を聴く耳を持たないことが明らかになる。その頑固さは、表面的には父 Lear に従いつつも、実際には父を毛嫌いし権力をわがものにしようとする 2 人の娘 Goneril、Regan への共感を観客の中に呼び起こすほどだ。Goneril と Regan がそれほどひどい人間に見えてこない。これまで King Lear は何度も観ているが、これははじめての経験であった。それほどに Sher は Lear の横暴ぶりを見事に演じていた。その Lear が何もかもを失い、権力があつたときには思いもしなかった人間の裸の姿を知るに至る。狂気に襲われながら、この過程を演じる Sher は見事というほかなかった。過酷な現実の中にあつて末娘の Cordelia だけは信じることができ、これからは「籠の中の小鳥のように」彼女と平安な時を送ろうと思ったものの、Cordelia は殺害される。彼女の亡骸を膝に抱えて嘆く Lear の姿には明らかにピエタ像が重ねあわされていた。「もう生きて帰らぬのか」“ Never, never, never, never, never ” と never を繰り返すごとに、Lear は Cordelia の体をゆすりながら、息絶える。“ never ” を繰り返すたびに体をゆすって生き返ってほしいとの思いを表す Lear を初めて見た。Hamlet を演じた黒人俳優 Paapa Essiedu がこの公演では Edmond を演じてい

た。Hamlet の時と同じように可能性を感じさせる若き俳優であることを再確認した。今年観た劇の中で最も優れた演出および上演であった。

今年は Shakespeare 没後 400 年にあたるので、大々的に Shakespeare 関連の催し物があるのではないかと期待していた。すでに述べたように、いくつかの大きな催し物が開催されはしたが、演劇界はとみると、Shakespeare's Globe が主催した The Complete Walk 以外にこれといった催しはなく、例年と変わらない状況であったのは少しさびしかった。そのような中で、特に気づいたのは、RSC の Paapa Essiedu に象徴されるように、黒人俳優の活躍である。ミュージカルでも黒人の活躍が目覚ましいという。来年上演予定の舞台 Harry Potter and the Cursed Child の Hermioni 役に実力派の黒人俳優 Noma Dumezweni が抜擢されたことでイギリスでは賛否をめぐって議論が沸騰しているようだが、もはや黒人俳優の存在なしには演劇界は成り立たない。これからも優れた黒人俳優が数多く生まれ、ロンドンの演劇界を支えていくことになるだろう。(酒井 記)

#### 130 ロンドン & チェスター観劇

##### Funny Girl (ロンドン)

8 月 17 日 サヴォイ劇場で『ファニー・ガール』(Funny Girl) を観劇した。初のロンドン再演が 2015 年 11 月からテムズ河南岸の小劇場メニア・チョコレート・ファクトリーで始まり、初日に全公演のチケットが完売した人気で 2016 年 4 月からサヴォイ劇場に進出した。このロンドン再演のために台本改訂したハーヴェイ・ファイアストーン (Harvey Fiersten) と、演出家マイケル・メイヤー (Michael Mayor) はアメリカ人だが、他の制作陣やキャストはロンドン勢によって制作された。サヴォイでも人気公演で予定より長く 10 月 8 日まで延長され、2017 年には全英ツアーが予定されている。

『ファニー・ガール』は、ジークフェルド・フォリーズ (1907-1931) で 1920 年代に大スターだった名喜劇女優ファニー・ブライス (Fanny Brice) の半生を描いたミュージカルで、フォリーズでの彼女の名場面を劇中劇として挟んだショウ・ミュージカル (1963 年初演) である。

『ファニー・ガール』の舞台は観ていないが、1963 年ブロードウェイ初演舞台の主演で有名になったパーブラ・ストライザンド主演の映画 (1967 年公開) は好きな映画の一つである。また、昨夏同じサヴォイ劇場でイメルダ・スタントンの名演に感激した『ジプシー』(Gypsy, 1959) の作曲者ジュリー・スタインの作品でもあるし、大いに期待して出かけた。1881 年にこの劇場がギルバート & サリヴァンのために開場した時、世界初の白熱電灯が輝いたヨーロッパ美しく豪華な劇場であった。世紀末以来の贅沢なサヴォイ・ホテルの名声を反映するかのよう、ウィリアム・モリスの趣ある絵で Safety Curtain が飾られていた。1993 年の改築では、1929 年改装のデザインが復元され、赤い絨毯やピロードの座席は昔を偲ばせ、馬蹄形で段差のある客席は舞台が見やすいし、古き良き劇場の雰囲気がある。

『ファニー・ガール』のブロードウェイ初演の折、作者のジュリー・スタインとボブ・メルルが主

役には現実のファニー・ブライス同様ユダヤ人をあてるべきと言い、その結果舞台未経験の若い歌手ストライザンドが選ばれた。彼女がまさに適役で舞台は成功した。また彼女自身も歌手として名声をあげたのみならず、舞台俳優としての成功と人気により、映画俳優や監督の道にも進む契機となった。

ロンドンでは、ブロードウェイ舞台の引越し公演（1965年）でストライザンドに熱狂した観客が、今回の再演には賛否両論で賑わった。映画も含めて記憶に残るストライザンドの圧倒的な名演から、ファニー・ブライスにストライザンド以外の女優は考えられないという人々もいれば、ウエストエンド制作（サヴォイ劇場公演）のミュージカル『キューティ・ブロンド』（Legally Blonde, 2009-2012）でローレンス・オリヴィエ賞主演女優賞（2011年）を受賞し、TVでも大人気のコメディエンス、シェリダン・スミス（Sheridan Smith）の存在があつてこそ、初演以来50年ぶりのロンドン公演が可能になったのだという評価もあった。初演当時の観客で昔の名作を懐かしむ人々が観客の多数を占めているからか、16日に観たGuys and Dollsより観客層の年齢が高かった。

さすがコメディエンスとして人気ある女優だけに、シェリダン・スミスは、ファニー・ブライスという喜劇女優を巧みに演じ、最後の別れの場面さえも、笑いをとっていた。「君はFunny girlだから大丈夫、やっていける」とニックが言うと、「どうして面白いのか分からないのだけど」とFannyはシリアスで悲しい独り言を言うのだが。“Funny girl”という台詞からミュージカル題名の由来が明らかだが、ブライスの舞台の“funny”なショウをうつした劇中劇でシェリダンが当然観客を喜ばせていた。さらにブライスと違い小柄な彼女の体型を笑いの種にするよう、背が高く美しいスタイルのジグフェルド・ガールズを傍に並べ、不恰好なブルーマー姿でダンスが下手な少女ブライスとして演出されていた。もちろんヴォードヴィルの滑稽なショウ以外でも喜劇女優ぶりを発揮し、楽しい舞台となっていた。

公演はトランペットが鳴るジャズ・エイジの雰囲気の前奏で始まる。物語は、舞台女優ジグフェルド・フォリーズのショウ・ガールに憧れる13歳のファニー・ブライスが美人でないのに無理と家族や友人に言われながらも、ジグフェルドのレビューに採用され、失敗を重ねながらも斬新でコミックな発想による演技で喜劇女優としての人気を得、とうとうフォリーズの主演を掴むまでになるというものだ。ショウ・ミュージカルの典型的な筋である。しかも貧しいユダヤ系の不美人の娘が思いがけずハンサムな男性と恋をし、上流風の彼と結婚するというシンデレラ物語でもある。

昨年の『ジプシー』は、衰退するヴォードヴィルの演技を娘達に教えこみ、娘たちをスターにしようと必死に生きるママ・ローズが主役である。ファニー・ブライスとママ・ローズの生涯がほぼ同時代なので、両作はヴォードヴィルのショウがコミックな劇中劇になるミュージカルという共通性をもつ。スチュアート・J.ヘクトによれば[Stuart J. Hecht, 103 -]、初期のブロードウェイ史においてアメリカン・ドリームを具体化する「移民の娘の成功」というシンデレラ物語が数多く作られたが、『ファニー・ガール』はその1変形である。ファニーが移民中でも一番差別されるユダヤ娘であるのに、その民族性を明らかにしながら成功する点で注目すべきである。そして貴族階級のないアメリカでは富裕なWASP（イギリス系白人で新教教徒）が王子様になる。ジグフェルドのような成功した事業主と友だち付き合いし、欧州上流階級風の服装と洗練された物腰を身につけたニックはファ

ニーにとって WASP に見える。現実のニック・アーンスタインは、富裕な家庭に生まれイギリス聖公会教会に通い、上品な振舞や教養、美しいものへの愛好を身につけたものの、実は成人すると賭博や悪事の世界に入り家族と縁が切れていた。ファニーは母がユダヤ系でユダヤ教、ユダヤ家庭に育った自分と違って、ニックは上流だと憧れるが、彼も父方はユダヤ系である。しかしニックの賭博以外の裏側は描かれないまま、憧れの的のニックとの恋とファニーのショーの大成功とで1幕が終わる。

相思相愛で幸福な新婚生活で2幕は始まるが、ニックの上流階級との交際は賭博場と競馬場で、生計の糧は賭博の儲けであった。詐欺事件で刑務所に入る時別れようと彼は切り出すが、出所日直前にニックとの生活を大事に暫くは舞台を降りさせてとファニーはジークフリードに頼む。しかし成功したファニーと落ちぶれた彼との結婚生活は無理と思うニックのプライドを知ったファニーは、ニックと別れる決心をする。現実はお出所と同時にニックは消えてしまったのだ。ニックとファニーとの娘婿 Ray Stark が初演舞台の制作者であるので、ニックの犯罪も二人の別離もニックの自己犠牲的精神が強調され美化されて描かれる。そこで舞台のファニーは、現実のファニー・ブライスがニックを思って歌った「私の愛する人」(“My Man”)を泣きながら歌う。この歌は彼女にしては珍しい感傷的な歌だが、別れた後もニックを思って舞台上で歌い続けた歌で、「ファニー・ブライスの歌」として有名である。ただし、この歌は今年の舞台では省略された。ファニーは舞台があるし、「前に向かって進んでいくわ」(“Don't Rain on My Parade”)と歌って幕が降りる。

そこで、『ファニー・ガール』は単なるシンデレラ物語ではない。結婚し富裕な男の妻となる幸福を得たものの、成功した女優であるファニーはその男とは別れ、男に頼らず独立して生きていくと終わるのだから。そうした女の生き方はミュージカルにおけるアメリカン・ドリームの実現でもある。この点で『ジプシー』と似る。

シェリダン・スミスによって、コメディエンヌとしてのファニー・ブライスは充分に表現されていて、観客にも人気で批評でも賞賛されていた。ただし、シェリダン・スミスの歌は今一つであった。ジュリー・スタインの音楽はジャズからオペラ風まで多彩であり、ベルティング歌唱も必須で、高い歌唱力を要求する。とりわけ、1番有名な曲、地声の高音で息の長いしかも朗々と歌う歌“Don't Rain”は、シェリダン・スミスは歌いこなしてなかった。観客が歌によって人物に共感をもつという音楽劇の重要な相互作用が充分に働いていなかった。音程的には比較的歌いやすい“People”でも、ファニー・ブライスのユダヤ人としての悲哀や孤独を歌で聞かせ、同じ孤独なニックと共感をもつという場面が伝わらなかった。バーブラ・ストライザンドは“Don't Rain”を華やかに高音を伸ばして歌いきることができ、さらに“People”もしみじみと内心を歌うことができる。どんな声でもコントロールの効いた美しく耳に快い音で歌うことのできるので、シェリダンはどうい及ばない。そしてミュージカルはやはり歌あってこそなので、シェリダンの歌に不満が残ったのは残念だった。観劇の間は多くのコミックな見せ場で充分に楽しめたが、ファニー・ブライスというユダヤ人であるゆえに悲しみや孤独を隠して観客を笑わせることに徹するといった複雑な人間像は、これらのヒット・ナンバーが歌えないと伝わらない。またショーの世界で生き、頂点まで行くものの、恋人を失い、「でもこれからは自分ひとりで舞台上で生きていくわ」と歌う女性のヒット・ナンバーで終わるのは、さすが同じ作



曲家ジュリー・スタインの曲だけに、昨年の『ジブシー』に酷似している。だが、『ジブシー』の「すべてはバラとなって咲き誇るのだ」と舞台に生きてきたものの、母としてでなく新たな自身の生き方を見出して歌い上げるママ・ローズの最後のナンバーのほうが、より観客を感動させる。同じスタインの曲でも『ジブシー』は傑作で『ファニー・ガール』はそれほどの名作とは言えないと評されるのは、そこにある。しかし『ファニー・ガール』の歌はバーブラ・ストライザンドの名唱によってスタンダードとして愛好されている。見逃した1980年日本公演の鳳蘭のファニーと、ダンディな岡田真澄ニッキーのようなすばらしい名コンビに再演してほしいと願っている。(玉崎 記)

### 130 Half a Sixpence (チチェスター)

8月18日 Chichester Festival Theatre で、ミュージカル Half a Sixpence (「6ペンス硬貨の半分」)の夜公演を観劇した。チチェスターでは、名作の見事な新演出や未知の新作でも良く訓練された俳優達による観がいある舞台を観劇できるのが幸せだ。観客席はすべてstallという円形劇場風の造りで、段差のある階段席になっているので、1206席全てから舞台が見やすい。また幕がないから、客席に入ると、今回はフォークストンの楽隊席を模した美しいあずまの装置が円形舞台上に見える。

この作品 Half a Sixpence は H. G. ウェルズの自伝的小説『キップス』(Kipps, 1905年出版)をミュージカル化したものである。ウェルズはケント州フォークストン近くで生まれ育った。だが、離婚により母がウエスト・サセックス州のカントリー・ハウス Uppark House の家政婦になった。14歳の作者は母の勤務先近くの商店で働き始め、やがて海辺の町サウスシーの衣料百貨店に徒弟奉公した。徒弟奉公の後、彼は近郊のグラマー・スクールで勉強し、休暇や病気の時、母の勤めるお邸で過ごしたので、チチェスターに所縁がある。思いがけない遺産によるキップスの運命の変転は、ウェルズの実人生ではないが、ディケンズの『大なる遺産』と似ている。ウェルズはディケンズを意識してこの小説を執筆したと言われ、出版するや、ディケンズの再来ともて囃された。

Half a Sixpence には、ウエストエンド制作1963年初演のオリジナル・ミュージカルが存在する。それは1965年ロンドンから転じたブロードウェイでも大成功をおさめ、映画化もされた(1967年邦題『心を繋ぐ6ペンス』)。音楽・歌詞はデイヴィッド・ヘネカー (David Heneker) により、脚本は『ボーイング、ボーイング』(Boeing-Boeing, 1962英語版初演)の翻訳台本で人気を得たビヴァリー・クロス (Beverly Cross) によって書かれた。Half a Sixpence はトニー賞楽曲賞と作品賞候補となったが、ヘネカーは1958年のフランス・ミュージカルの英国版『あなただけ今晚は』(Irma La Douce, トニー賞候補)にも英語歌詞を書いた。この舞台 Half a Sixpence は、プレスリーの歌で英国1位を誇るロック歌手、トミー・スティール (Tommy Steele, 1936 - ) の人気にあやかり、彼が歌にダンスに活躍するミュージカル・コメディとして創作された。これは、ロンドン・ミュージカル『オリヴァー!』(Oliver!, 1960年初演。Lionel Bart 曲)に続くロンドン発ミュージカルの2番目の成功となった。

今回の改訂新版公演(2016年)はカメロン・マッキントッシュが2008年に再演を思いついたことから生まれた。彼は当時公演中の『メアリー・ポピンズ』(Mary Poppins) [West End, 2004初演 - ]

& [Broadway, 2006 - ] の舞台ミュージカル化に関わった作者たちに新版創作を依頼し、自らもその翻案作業に参加している。台本のジュリアン・フェロウズ (Julian Fellowes) には、彼による BBC 大河ドラマ『ダウントン・アベール』(Downton Abbey) に見られるような階級に絡む様々な人間模様が新作に期待された。新しい音楽はジョージ・スタイルズ (George Stiles) [曲] とアントニー・ドルー (Anthony Drewe) [歌詞] による。始めにフェロウズがあらすじと歌の配置の原案を書き、それを基に新曲が考えられ、その上でヘネカーの歌を 7 曲残し、その歌詞や音楽の変更を検討した。スタイルズとドルーはドラマとじっくり合う新曲を 8 曲創作した。さらに初演では全 17 曲のほとんどをスティールが歌っていたが、それらを主役以外の俳優がソロで歌うように変更したり、ハーモニーのある重唱や合唱曲への編曲により、ミュージカル・ナンバーが多彩になるよう変えた。以下、いくつかの歌をとりあげ、初演の映画化の DVD と初演資料を用いて、今回の改訂新版は初演と比べどのように変化しているかを検討したい。

まず、主題歌の 2 重唱「6 ペンス硬貨を半分づつ持って、お互い忘れないようにしよう」と誓う “Half a Sixpence” は、初版ではキップスがソロでメロディを歌った後、2 番でキップスの歌に合わせアンが部分的に繰り返しを歌うものであった。それを、新版ではキップスが前置き (verse) を歌った後、アンがメロディ (refrain) を歌い、それから二人が交互に歌い、重唱としてハモリを入れる音楽的に魅力あるナンバーに変えた。ヘネカーの初版では “Long Ago” は田舎での昔を思いだしてキップスとアンが「遠い昔、無邪気な日々」と 2 幕の終り近くで二人の仲直りの歌として 2 重唱で歌われた。新版では、この歌の位置と歌われ方が大きく変えられた。新版でも、初版と同様 2 幕の仲直りに使われるが、それ以前に 1 幕の 2 人のフォークストンでの再会の時、アンのソロによって歌われるのが重要である。まず、台詞で昔囚われのお姫様のアンをキップスが救った遊びを二人で懐かしんだ後、二人の愛の誓いである “Half a Sixpence” をアンが歌うが、キップスが加わらないので短いリプライズで終わる。続いて、去って行くキップスを見てアンは “Long Ago” を悲しく歌う。昔と変わらない愛を歌う歌詞に変えられ、メロディもアンの悲しみが高音に高まり、その後ピアノで繰り返されると変えられ、彼女の愛で観客を感動させる。その結果、今は心変わりしたキップスと誠実なアンとを対比させる。次の場面でヘレンと仲良いキップスを見た後、アンが “A Little Touch of Happiness” を生意気で元気のよいフロと歌う時、アンの別の内面が描かれる。二人して男がいなくても、ちょっとした幸福があればいいのよと歌う。早口のしかもアップテンポな曲である。「パンチ [恋人] のいない私はあの人がいなくて寂しいの」とアンの感傷的気持ちも歌われるものの、この 2 重唱でアンは泣いたりせずに、浮気なフロと一緒にあって、前向きな生き生きとした曲を軽快に歌う。アンの力強い声は、積極的で現実的な性格を表す。全般的に少しばかりの幸福を求める二人の現代的な娘達の明るいお喋りと聞こえるのが面白く、魅力的である。こうしてアンはソロの歌と新しい歌詞によって、愛に生きる娘ながら現代的な娘として肉付けされた。

年上の魅力的な友人チタロウ (Harry Chitterlow) は、階層社会からはずれ、巡業の俳優で、小さな劇団の座長であり、芝居の脚本家である。彼は祖父の相続人アーサー・キップスを探す尋ね人の新聞広告を教えてくれ、キップスに数々の転機をもたらす。彼のお陰でキップスは遺産を受け取って

金持ちになる。チタロウが関わる歌は、皆エドワード朝ミュージックホール風の庶民的な歌である。初演版の“Money to Burn”は「お金があればバンジョーをかき鳴らしたい」とキップスが歌い、その後チタロウの劇団の女優ローラと俳優達が歌ってダンスした。今回新版の“Money to Burn”は、パブで「お金があればバンジョーが欲しい」と歌うキップスに続き各々夢を語る店員仲間の歌として始まる。チタロウが遺産の情報をもって登場すると、キップスを皆で祝う楽しいコーラスと賑やかなダンス場面になる。チタロウの新曲“Back the Right Horse”(勝ち馬にかけるのだ)もパブで店員仲間と共に歌う愉快的な歌で足踏みしながらのリズムも楽しい歌である。競馬のことを歌うかと思うと、劇場の話になる。さらにチタロウは自身の書いている芝居に投資しなさいと勧め、幸福な結末の伏線を張る。この新曲は、『マイ・フェア・レディ』のイライザの煙突掃除人の父が結婚の日パブで歌う歌に似て、もう一つのチタロウのソロ「逃げてしまった女、決して捕まえることができない女が一番欲しいものなのだ」(■The One Who's Run Away■)と同じく楽しい酒場の歌である。従って、新曲は初演版のチタロウの歌ともぴったり合い、新しいドラマに調和しているが、チタロウの新たな側面を語るものではない。イアン・バーソロミュー(Ian Bartholomew)は長い経歴の名優として(最近では『ヘンダソン夫人の贈り物』で助演男優賞候補)、変わり者の芸術家チタロウとして魅力をふりまいている。

令嬢ヘレンを演じるエマ・ウィリアムズ(Emma Williams)も、同じく2016年春の新作『ヘンダソン夫人の贈り物』でモリーンを演じ、オリヴィエ賞の助演女優賞候補だった期待の女優である。キップスは、ヘレンが“She's Far Too above Me”(ソロ、ヘネカーの曲)「上流過ぎて届かない高嶺の花」だと歌う。新版で重要なヘレンの新曲は、“Believe in Yourself”である。1幕の始め、キップスと知り合ってすぐに歌われる。貧乏な上流令嬢ヘレンはロンドン大学に籍をおき、労働者階級のための夜学で木工を教えている新しい女でもある。そこで彼女はキップスに「自分を見出しなさい。そして自身を信じて生きなさい」と歌う。これはキップスの先生として、キップスにどう生きるかを教える歌である。もう一つの新曲、“Just a Few Little Things”も、ヘレンが「少しでも気をつけて変えていけば紳士らしく振舞えるのよ」と教える歌で、キップスの下品なまでに派手な服装と上流を変に模倣した振舞いを少し変えてと注意する。変更例として「母音に気をつけて。“h”に気をつけて」と、ヒギンス教授のように教える。つまり、キップスのほうは惚れ込むものの、ヘレンは恋するとは言えず、彼女の教え導く人としての役割と真面目な性質が明らかである。従って、キップスを階級下として見た上で優しいヘレンが新曲で明らかになる。上流だが貧乏な家族皆が貧乏を抜け出すためにキップスの金を利用しようとし、ヘレン自身は新しい女として知的生活を求めるためにキップスの求婚を承知したのだ。アンとヘレンは新曲と歌詞の改変や歌の位置により、初演と比べ人間らしい深みをもち、自分の考えをもつ2人の女性へと変えられた。

そこで2幕は上流社会に入ったキップスの認識の場面となる。ヘレンの母(Mrs Walsingham)と兄Jamesに「金持ちなんだから、贅沢な宮殿を建てよう」(■We'll Build a Palace■)とキップスは唆される。結局、James(株式仲買人)に財産の管理を任せため、彼の横領によってキップスは遺産を失ってしまうのだ。だが、その直前、キップスは上流のLady Punnetのパーティの晩に「素

朴な歌を弾こう」(■Pick out a Simple Tune■)と歌い、上流社交界の皆を喜ばせる。自分はいつもバンジョーを弾いて「素朴な歌」を歌っていたいのだと自己発見の結果、ヘレンには結婚を止めたいと言う。この「素朴な歌」は、時代背景(1900年頃)を表し、当時の劇場で人気のあった ragtime の曲である。歌に続いて、キップスは生き生きと若さあふれるダンスで跳び跳ね、踊りまわる。世紀末風の金色に黒の模様の豪華なドレスを着た夜会の客が指ならしやスプーンを鳴らしリズムをとり、客の一人はシャンデリアにぶら下がりてプランコをし、全員が歌うか音楽の伴奏かで楽しむ大騒ぎとなる。この新曲でもまるでヘネカーの歌のような単純な歌詞の繰り返しが多く、ポロン、ポロンとかカチャカチャといったヘネカーのような擬声音が面白い。キップスの庶民的な歌とバンジョーが、いわば酒場の庶民階級のように上流社交界を振舞わせ、皆と一緒にの楽しさを味あわせる。みごとな振付と全員のアンサンブルにより、目を奪う見事な場面になっており、全員の楽しい歌と動きによって観客も歓声をあげ大拍手であった。この新曲は2幕の華だが、キップスの性格に深みを与えるものになってはいない。この歌は素朴な楽天的な若者を表し、むしろ、初演版のキップスそのままである。

バンジョーを弾いて「素朴な歌」を歌いたいという自分の本心がやっと分かり、間違いを覚ったキップスがアンと仲直りする。フィナーレは、ヘネカーの「ピカッ、バン、大騒ぎ！」(■Flash, Bang, Wallop!■)という人気曲が、パブでのアンとの結婚式の結婚写真の歌に歌われ、全員で歌い踊る場面になる。歌の題名は、結婚式で写真のフラッシュを焚いた時の大きな音とビールが激しく沸騰する音、そして幸福と大騒ぎの歓声を表す。オリジナル舞台から皆が覚えている人気曲で劇場の観客も口ずさみ、皆大喜びである。幕が降りる直前、チタロウがシンデレラの魔法使いの如く登場し、脚本が儲かったので、貧乏に戻ったキップスに多少の分配金が入ると告げる。大喜びの新夫婦はチタロウのオートバイに乗って新婚旅行へでかけてフィナーレ。チタロウのリードで再び、“Flash, Bang, Wallop!”のリプライズ。

キップスとアンを演じるチャーリー・ステンブ(22歳のCharlie Stemp)とデヴォン・エリーズ・ジョンソン(Devon -Elise Johnson)は新人であるが、良く訓練された声と歌、そして巧みなダンスで好評である。とりわけ、ステンブのダンスの才能は格別で、若さあふれるダンスが魅力的である。ステンブは複雑で込み入った動きを喜びにあふれて踊る。ステンブの人をひきつける少年のような明るい容貌がさらにミュージカル・コメディの明るい特質を強めている。笑顔と活気あふれる身体的妙技に魅了された観客に大好評で、複数の批評家からも「スター誕生」と評され、ロンドンでもノエル・カワード劇場での開幕以来(2016.10/29開幕)大騒ぎされている。

アンドルー・ライト(Andrew Wright)の才気縦横のダンス振付のゆえに、この作品はきわだって楽しい舞台になった。ライトの振付は、軽快でスピード感あり、キャスト全員を巧みに動かし、効果をあげている。ライトは2011年チチェスターで英国新版「雨に唄えば」(Singin' in the Rain)の振付を担当し、主演Adam Cooperの人気もあって、2012年オリヴィエ賞受賞、日本にも2014年来日公演、2017年来日再演予定だ。さらにライト振付で2015年にチチェスター初演、ウエストエンドに進出した『ガイズ・アンド・ドールズ』は2016年オリヴィエ賞振付賞候補になった他、前述した2016年『ヘンダソン夫人の贈り物』の振付も担当しており、数々の受賞歴をもつ。



装置は、オペラおよび演劇でも有名な美術デザイナー、ポール・ブラウンによって設計されている。幕開き前、浮き彫りの支柱と円錐のような装飾的な屋根つきのあずまやの装置がほぼ舞台全面を占め印象的である。このあずまやは時代背景の 1900 年頃に盛んだった夕方の野外コンサートの楽隊席に使われた。支柱の一つの脇にはガス灯があり、19 世紀の設置を暗示する。開演前からあずまやの背景壁には青い空と風にたなびく白い雲、床面には風に揺れる水面という印象的な映像 (Luke Hall's Video) が投影され、第 1 場の若い主人公たちが遊ぶ草地を表し、2 場以降では仕事がすんで散歩や遊びに出かける海岸沿いの散歩道の牧歌的な風景を表している。この円形装置は、回転によって瞬時に多種多様な場面に転換して見せる工夫である。まず、円形の装置が回転し、あずまやが消えると、主人公が働く大きな衣料品店の場面が現れる。中央に大きな伝統的時計があり商品の陳列棚がずらっと並んだ室内場面である。次の回転によって、リアルなパブのカウンターの場面へ、またシャンデリアの輝くお邸の客間の場面へと舞台は変わる。ブラウンは、この洗練され印象的な舞台美術と同時に、物語の雰囲気を見事に表現している衣装もデザインしている。エドワード朝を巧みに再現し、『マイ・フェア・レディ』を思わせる世界に観客を誘いこむ。とりわけ、1 幕のフィナーレ “If The Rain's Got to Fall” は、イギリス的な「天気」についての歌で、晴れた日にヘレンに会って愛を告白したいというキップスの歌なのだが、この舞台では海岸の草地でのガーデンパーティで、美しい優雅なドレス姿の上流婦人達が日傘を回して歌い踊る楽しく華やかなアンサンブルの見せ場になる。この舞台でブラウンの美術は観客を懐かしい世界に連れていき楽しませ、高い評価をうけている。

演出は、最近ヒット作を飛ばし成果をあげているレイチェル・カヴァナー (Rachael Kavanaugh) である。近年リージェンツ・パークの野外劇場で 2013 年の『サウンド・オブ・ミュージック』、続いて 2015 年の『略奪された 7 人の花嫁』(Seven Brides for Seven Brothers) と、いずれも野外劇場を生かした楽しいアンサンブルが見事であった。両者とも、オリヴィエ賞の主演女優賞候補およびミュージカル再演賞候補となった。

優れた経歴の演出家、そしてチチェスターでも経験のある劇場をよく知っているスタッフ、才能ある振付のアンドリュー・ライトや美術のポール・ブラウンが参加して、24 人のアンサンブルを見事に鍛えてこの新作改訂版の舞台が作り上げられた。そこで、チチェスターで開幕するや熱狂的好評とスタンディング・オベーションで迎えられ、ウエストエンド進出がすぐに決められ、その華やかなアンサンブルからウエストエンドでも最高に人気ある舞台として評判になっている。

しかし、二人の女性と同時の婚約や上流紳士の模倣など、キップスのさまざまな失敗と愚かな行為が原作では風刺され、愚かで女にだらしない性差別主義の男だと思わせる。ミュージカルでは愚かだが無邪気な若い青年なのだから、愛すべきと描かれていて、原作の「素朴な人の物語」(The Story of a Simple Soul) という副題のまま、田舎から町に出た無知で素朴な若者の失敗続きの青春と幸福な結末となっている。この初演ミュージカル以来の素朴な若者の青春を描くミュージカルという特徴が新版でも受け継がれている。また二重婚約での人物の心理とドラマこそが、この古いミュージカルにおいて、現代にも通用する今日的課題となるが、新版では二人の女性の内面は歌と歌詞に表現されるよう変えられたものの、肝心のキップスが変わらず、愚かな楽天的若者のままなのでドラマは豊かに

なっていない。結局、ミュージカルとして洗練を加えただけで、初演ミュージカルと同じミュージカル・コメディを作るとしたのだと分かる。おそらく、その手法で『メアリ・ポピンズ』を舞台ミュージカルに作ったのであろう。だが、マッキントッシュはすべての年代の観客を喜ばせるために、新しい創造チームによって、回顧的な美術と見事な歌やダンスによって観客に感銘を与え、観客を幸福にするミュージカル舞台を作り上げた。

実は、マイケル・ピリントンの「ガーディアン紙」(The Guardian 23 Nov. 2016)の批評、“distinctly British musical”を読んで、納得するところがあった。彼は最近のイギリス・ミュージカル『ピリー・エリオット』、『マティルダ』、『ヘンダソン夫人の贈り物』などをあげ、『オペラ座の怪人』以降の国籍不詳の暗いミュージカルとは違って、イギリスの階級社会を背景にしてイギリス人を語るイギリスのミュージカルといえるこの作品や最近の傾向が喜ばしいと言う。筆者自身も最近のロンドンでのミュージカル観劇により、この『6ペンス硬貨の半分』だけでなく『ピリー・エリオット』の他、2016年の『恋』(Go-Between 恋文を渡すため「恋人達の間を行き来する使い」の12歳の少年)ででも、『オリヴァー!』以来の階級社会の中の少年の成長を描くイギリスの伝統を感じた。それが『オペラ座の怪人』などのメロドラマではなく、ミュージカル・コメディの形で表されているのが、イギリスらしいミュージカルの伝統なのだと思うされた。それゆえ、あえてミュージカル・コメディのまま、Half a Sixpence が再演されたのではと思い、それを付け加えておきたい。

(玉崎 記)

### オペラ・セリア 3 演目

- 88 オペラ『ポッペアの戴冠』(東海バロックプロジェクト) 9/24(土) 14:00~ 名古屋市芸術創造センター
- 111 オペラ『セミラーミデ』(演奏会形式・藤沢市民オペラ・園田隆一郎指揮・安藤赴美子・妻屋秀和主演) 10/30(日) 14:00~ 藤沢市民会館大ホール
- 130 オペラ『皇帝ティートの慈悲』(愛知県芸術劇場大学院オペラ) 12/4(日) 14:00~ 長久手文化の家森のホール

今秋から冬にかけ、ほぼ1ヶ月おきに、日本ではめったに見ることのないオペラ・セリアの名作を観ることができ、それぞれの公演には多少の不満もあったものの、オペラ・セリアの名作を舞台で見ることができたことと、その音楽のすばらしさに感動した。まず、名古屋の『ポッペアの戴冠』(1642年初演)は、東海バロック・プロジェクトが主導した古楽器オーケストラによる舞台上での小編成(9名)の古楽器奏者によるモンテヴェルディの音楽に感激した。歌唱のほうは、カストラート役と想定されるオットーネをカウンターテナーの弥勒忠史が演じるのに期待して出かけた。実際、弥勒忠史の名唱は、バロック・アリアの素晴らしさを教えてくれた。オットーネは悲劇の実質的な主人公であり、妖艶で浮気な妻ポッペアを皇帝ネローネに奪われる。題名役でヒロインのポッペアは、細く軽い声すぎて不倫している肉感的な女、妖婦の女のポッペアらしくなかった。声に艶のある、高い

響きが必要だと思う。何よりバロックだから高い声を華々しく、しかし自在に操ってほしい。皇后オッターヴィアは新皇后になりそうなポッペアを殺せとオットーネに命ずる。妻をまだ愛し気のすすまぬオットーネを皇后オッターヴィアは脅かして迫るものの、オットーネを愛してもいない。不倫のポッペアを愛し、皇后を捨てて人妻ポッペアに皇后の冠を授けるという皇帝は、残虐で悪名高い皇帝だけに、ズボン役の女声ソプラノだと不満が残った。女声同士だと声質がよほど違わないと、恋人に思えない。バロック時代には堂々としたカストラート歌手が演じたらうと思い、せめてテノールで聞きたかった。不満だった女声陣の中で、皇后付き侍女ドゥルシッラ役の本田美香は、良く響く声で良かった。オットーネを愛するために、オットーネの言いなりに自分の衣装を貸す。だが彼がポッペアを殺し損なって衣装のためにドゥルシッラに罪がきせられそうになっても、秘密を守る。演じがいのある良い役だが、声も良く、主役よりはるかにバロックらしい歌唱を味わえた。陰影ある人物像があまり描かれないオペラ・セリアの中で、オットーネとドゥルシッラは実質的に最も人間的苦悩を歌いあげていた。

陰謀が明らかにされ、オットーネ、ドゥルシッラ、皇后は皆国外追放される。最後はポッペアの戴冠で華やかなファンファーレの中に終わる。ポッペアの戴冠という悪事の勝利で良いのかと唖然とする。しかし、本当に珍しい演目を聞き、モンテヴェルディの音楽をバロック楽器により聞くことができて幸せであった。

池山奈都子の舞台装置は簡素ながら、古代ローマを巧みに映し、とりわけ天井のプロジェクションで、ローマの風景や彫像らしい絵柄が映されるのが、雰囲気盛り上げていた。

次は、藤沢市民オペラ『セミラーミデ』である。藤沢芸術監督の園田隆一郎が最も愛好するオペラ『セミラーミデ』をやりたいと企画し、藤沢の市民管弦楽団と市民合唱団が大きな力を発揮した演奏会形式のオペラ公演であった。『セミラーミデ』は、メトロポリタン・オペラの1990年の公演がNHKで放映されたのしか見たことがない。しかし、2016年夏ロンドンのプロムス、第68夜(9/4)で、これまで夜の女王などで評判のアルビーナ・シャギムラトヴァ(Albina Shagimuratova)という新しいロシアのコロラトゥーラ・ソプラノが、セミラーミデをマーク・エルダーの指揮とAge of Enlightenmentのオケで歌い、ダニエラ・バルチェローナのアルサーチェが相手役で最高の評価を受けている。長時間のオペラ・セリアだけに、プロムスの公演は、19:30に始まり、23:30に終わるコンサート形式であった。上演されることのない『セミラーミデ』だが、藤沢でもコンサート形式で聞いても圧倒された。ロッシーニが4時間で演奏するために削除する場面を示しているとのことで、プロムスも藤沢もその短縮版で演奏されたと思う。近々に英国ロイヤル・オペラでジョイス・ディドナート(アルサーチェ?)主演で上演が構想されているが、プロムスでのシャギムラトヴァが大絶賛だっただけに、彼女のコロラトゥーラを聴いてみたい。

藤沢では、指揮、管弦楽団、合唱が良いし、ソリストも安藤扶美子以外は、それぞれコロラトゥーラを歌い良かった。とりわけ、テノールのイドレーノを歌った若い歌手、山本康寛が美声だった。王女に愛されてもいないのに、熱心に愛を訴えるテノールらしい高音の美しさに感動した。山本康寛は

びわ湖ホールで聞いたことがあるが、こうした貴族的な高音のただもう愛するだけのテノールがびったりだった。もう一人、一番端役ともいえるミトラーネを歌ったテノール岡坂弘毅はアンサンブルでも良く響いていた。名古屋出身の歌手、バスの伊藤貴之も祭司役をしっかりと歌っていて嬉しくなった。藤原歌劇団のベテラン妻屋秀和のアッスールは装飾歌唱も安定していて問題なし。ただ若い時のサミュエル・レイミーの映像を見た後なので、イドレーノやアルサーチェという若者と張り合う役だから、伊藤貴之のような若い人がやっても良かったのではと思えた。

総体的に良かったのだが、王子アルサーチェの中島郁子がいかにもメゾソプラノのズボン役で、ケルビーノや『仮面舞踏会』のオスカルならいいのだが、勇敢な騎士アルサーチェということになるともっと堂々とした声が必要と思う。とりわけ、MET 映像で豊かな響きのコロラトゥーラを見事な声で歌うマリリン・ホーンを聞いたので、惜しい気がした。またヒロイン、セミラーミデの安藤赴美子は蝶々夫人やヴェルディの大人のヒロインを歌うロマン派の歌手だけに、高音は美しく、コロラトゥーラも努力していたがコロラトゥーラ・ソプラノとしては充分と言えなかった。パルトリの歌う「麗わしの光に」(LD) はただ美しいだけでなく、細かく刻まれた音符を自由自在に軽やかに歌い、それも豊かな艶ある声で魅力的だった。そのような歌唱を聞きたかった。『ポッペアの戴冠』と同様、ヒロインと相手役が女声であるため恋人らしくないということも気にかかった。

物語は『ハムレット』に似た話で、王の死去に伴い、王妃セミラーミデが女王として治めている古代バビロニアで、次の王の任命を皆が待っている。女王が選んだのは勇士アルサーチェで彼を王にして自分は彼の妃になりたいと願う。だが、実はアルサーチェは先王とセミラーミデの間の息子で、先王の幽霊が現れ、自分を殺した敵を討つようと王子アルサーチェに命ずる。王への毒薬を準備した母を討つのは気がすまず、母の共謀者アッスールを殺そうとするが、暗闇の中誤って母を殺してしまうという悲劇である。

衣装も自前らしいし、スタンディング・マイクに向かって歌う完全な演奏会形式で装置もまったくなかったが、たった一つ、先王ニーノ王の幽霊デニス・ビシュニャが、舞台にずらっと並んで歌うほかの歌手とは離れて舞台脇から幽霊として出て歌う趣向があって雰囲気を出していた。

演奏会形式とは言え、コロラトゥーラを見事に歌う歌手が多く、すばらしい公演だった。藤沢の市民オケと合唱団は大勢の編成で迫力あり、市民と思えない立派な演奏で感心した。名指揮の園田隆一郎がぜひ藤原歌劇団の本公演などでも、とりあげてほしいと思った。

愛知県立芸術大学のオペラ『皇帝ティートの慈悲』では、矢澤定明の指揮に感嘆した。昨年の『コジ』や『サンドリヨン』では、馴染みの名曲だけにとりわけ気づかなかったが、今回は県芸大として初めてのオペラ・セリアを見事に指揮で引っ張り、台本が悪くモーツァルトの音楽だけが良いというこのオペラを緊迫感のある運びのドラマ造りで魅力あるオペラにした。美術も例により美術学部の苦心が見え、階段状の舞台や箱のようなピラミッド型もあり、簡素な舞台ながらギリシアを模倣する古代ローマの整然とした建築様式を思わせた。奥行きのある舞台の一番深いところから皇帝が出てくるとか、幕の前での演技とか、いろいろ工夫されていた。若い歌手たちがこの大曲を歌いあげて立派で



あった。皇帝は1幕2幕で歌手が変わるが（つまり2日で4人出演だが）、4日では甘いテノールの声の1幕の歌手もよく、2幕の皇帝らしい重みのある声のテノールもよかった。問題は女性ソプラノ、ヴィッテリアで、悪役なので、悪事を恋人に押し付ける利己主義にもかかわらず、性的魅力で男を惑わすという魅力のあるヒロインでなければならない。が、単なる強い女の歌であった。とはいえその強さがでていて、悲劇的オペラ・セリアを成功させていたと思うが。

セストはMSと指定され、永竹由幸ではソプラノとあるように、相当高音もある。しかしモーツアルトは、女性といえば、皆ソプラノとしていたという。3日のセストは男役にぴったりの背の高い歌手だったが、歌は相手役の悪女よりもやさしげで美青年型と思えた。正義の人なのに悪事に唆されてしまう悲劇の騎士といったところは、弥勒忠史の役オットーネとほぼ似ているので、声が女性で残念だった。もっと低く重みのあるコントラルトか、カウンターテナーでやってほしかった。

多少の不満はあるものの、軽いオペラ・ブッフアを上演してきた県芸大が、セリアを始めてとりあげ、感動を与える舞台に仕上げていたので感嘆だった。名古屋で『ポッペア』と『ティート』と続けて珍しい演目を見ると、名古屋のレベルがあがったと嬉しくなる。ぜひ、県芸大には、次回もセリアをやってほしい。古典的なヴィヴァルディ、ヘンデル、モーツアルト、マイールなどのセリアを上演してほしい。

（玉崎 記）